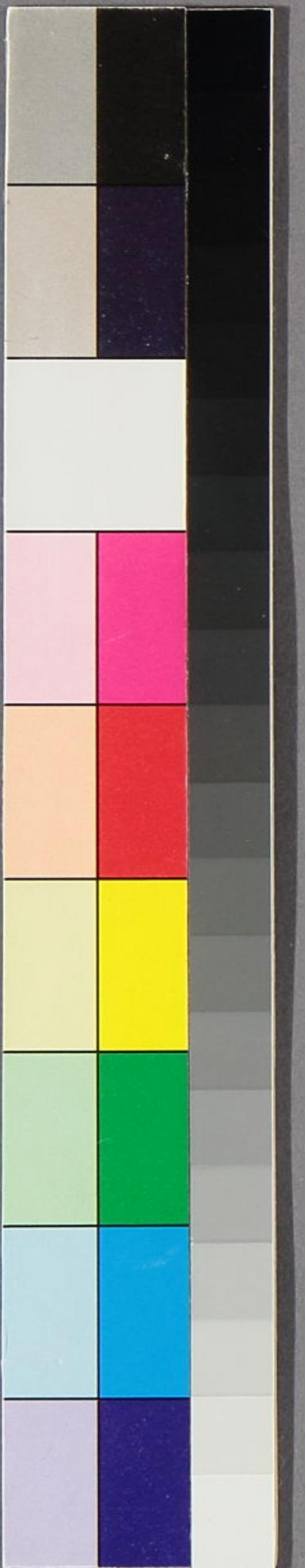


薰蕕錄

天

曾4
775
60



190 180 170 160 150 140 130 120 110 100 90 80 70 60 50 40 30 20 10 2

曾4
門號
卷

董蘓錄卷之二十九

目錄

鬼神論

新井白石

辨道書

大宰香臺



薰蕕錄卷之百四十八



中村直道輯

白石先生鬼神論序

夫鬼神之跡恍兮惚兮言之難也尚矣易傳曰陰陽不測之謂又曰知變化之道者其知神之所爲乎唯神也故疾而速不行而至中庸曰鬼神之爲德其盛矣乎視之而弗見聽之而聞體物而不可遺使天下之人齊明盛服以承祭祀洋洋乎如在其上如在其左右嗚嗟先聖之教至矣乎

我邦寶正之際白

石源公學該洽博識遠淵深著作之富勳及
瑣碎其所釋鬼神論一篇能近取譬而言所
難言者也其辭則詼々說則典始則根據經
義中則旁引詎異於各歸納雅正實足發蒙
矯機矣唯是一時應需小而辨物作者自不
不爲意私淑之徒轉傳謠寫國字糾紛訛誤
相錯殆至不可讀頃日鬻書家某為矯此篇
校者某々刻已成吾所知枚商者來處求叙
焉余謂校者所照尤勝轉傳之物無定本之
取正則恐有未悉考究者每句余不與焉要

之鬼圖小冊耳擬類固不足檜源公之瑞此
刻足以極和淑之徒謠寫乃為叙以弁其首
云

寃政庚申秋九月望 天山真逸撰

鬼神論 上

筑後守從五位下源君美著

鬼神のてぬよんじは
えあらは國かやか
めふりす信する事まこと
事これかくわくわくわくわく
法りよくゆくゆくゆくゆく
と九十九人より一して
海きり事よとひかへたそりと
子夏の如すの如もとあつやう
向あらむに吾おせらうのうれいと云ひ
少し孝子順孫のちと助くをぞと成道と云ふ

より取るるものも本引といひしハ不孝の子ア
その親と葬うる人を以て死せるものあらる
事あり人を以て死せるものありす事より
ウシテ後と初の子と夫あるを入後ひるこれ
國とよく作るがくとおなすて又子供よく作
とおどりと人とはまうじとぞく祭
神事前人いきと生と死とすんばつうんとぞく祭と
うんと宣ましむる事から來るやうと
うるをばれとく余つまくと紙寫て後事
後事とよくかんさとぞくとぞくとぞくと
ちよよめにやうれどとぞくとぞくとぞくと
欲と達とれとやうれどとぞくとぞくとぞく

被服とかうりあらぬ人にはまうと民乃
義と皆はうる鬼神と旅て迷ふば鬼神と
行ふ事道すやあらかに以てありせてもももあれ
まくはゆゆく旅の生と死と別ひれと送り鬼
神ノ後事と皮すとく禮と記せり魂ノ明小
走八禮樂あらまくとくとく鬼神あらまく
はりりとくとくとくとくとくとくとくとくと
ゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
行ふ事道すれど食飲かくらべ禮ともとくとく
鷲一燐れば身取らるそん端湯ノ朱子のいふ
すまうりの角今誠と見だはれども

神のひ地位に於ては祇心公と
名を以て同禮と爲ふがくそつ
跡爲ゆるの事靈れど通じて
すうに詮内二の事と不思り
と申すとて（一えの事つて
仲達生と云ふ）その事遊りて仲
也と申すとて陽のありて仲
也と申す（陽のありハ仲也）これ均中の中の事也

内に席神あり 離のまゝ在りて先席の座をかく席伸
被茶のあづま ちうらへ二家の、民神と申す者
の邊うち 湊横渠たゞ一筆御と鬼神といひては、
あわゆべ、妙すと鬼神といひては、
此の靈神と陽の靈といひれ禮の通疏と又
前でいふ有り方神地祇人鬼といひ大の御神
神、天のあめと云ひてみ承の清めをうむと神より
月星辰の類されすりあつて靈化のよきを
福不可測矣あまく神名也地祇も山鬼も
うち門をすがれぢまほくそれくわくはす山鬼
海あれどせよつて、祇とさづ九派の宗祖今宗
望うる周禮はもくしてすりて、未見ハ若身の義す下

朱子の後人よりて傳へり本ハ鬼のとする事す
鬼と曰ふ人也」とハモ鬼の形にあらかじめの體
ある者也ゆき鬼體也鬼ノカムアリ鬼也
つて古ノ先王制タリレニ天下ヒニ御
めされといがれに主神地祇人鬼城山川也
津年あり日月星辰寒暑水旱山林川谷丘陵之
處トヨリ風雨となりテシテ天氣也
あくモ祀典トシテまれれ天神又群生の主ト社主ト建み
此乃ハ主社ト天社稷乃神主天也是謂之神也
而ハ同名申雷國門玉作素戸竈の七祀と主天也
司倉の祐主人之倉と行方主中霧室主作也
行方主神素戸主不作神室主作也而社方主
内を主よ七廟と制して春ハ禘の祭あり秋亦嘗の祭也

此れを秋の後候也と云はず唯封内乃山
川と稱する境内ハ主ト群生のため小山社と達ム
の主も小候社と通て又立廟立祀或達りれ五祀ハ七祀
也トトキアマハ三廟三祀庶々ニ廟二祀庶人の廟もあ
つ候也と有す其の先と廟よまつて一祀と有す
事と母也と謂ひ神と謂ひ先王乃祀典也故く
其名前也アリちとひて前祭ナリトアリ也ト
天子ハ天のミテ候ハ兩のミテ主たてのミテ天子ハ天地の中
也アリ天地の仰也少てすくはせくて天の氣との内
うち一人は清淨小あづらわくもなれど其誠敬と極
きうきものひちん小はうの天地乃氣をあづらひ集
うつて百神おづくその誠とうけしまひ乎一端

修まつてゐらず。さてその家の内の多ひたりのねづ
うりからくる所すれど其年のうち威徳よりす
御守りあまハ家の守り也。五祀の神す。とくとく
威威徳タク乃ら身身代也。清小郷吏官吏は五祀と祀る。有
の祀とゆ。禮不三年三年。奉々奉事。父母の天天子。庶人庶民よ
そぞろとこれとのちより卑下。往々往々空空氣され奉親子
考考す。つゝ空空氣を被被。二つもよりわす。下下りぬれとも
先先とまつて。いきうて。八七世八七世。うち下下りて。ひようお
おと跡跡と磨磨。士庶人士庶人。今まづ。ふす。其親とゆつて。ふしへ
まづめん。月月に人人外外とまし。意意魄魄也。天天と地地。小
又あり。うけたまはり。人人の事事。この種種と制制

神に事されよとみたはるゝと斯人より
は、アハ多めふい、一、宰相乃君弟のちとひあら
や小夫子云々治するれ力多儀家政等の文を
鄭のあきの、ト、本筋作みえあらじれうと云
えを思ひのえどもおひてよまくあきのとよへ
り化すと體と云ふ、湯をば體と
ト、ひうまわかげ、わざづ、小夫の氣とうけい
則ひとて脇とをもこれ魄すと小夫もこれ易む骨
化生とひ、附すとれバ朱子之湯、ト、りゆくとて一水とを連
じつて又圓すと、すすりて氣とえうく氣水とよゆ
その體相の、ト、かくして即く、うごく、これ湯之志
をもつてと竟と云ふ、物がれ地二古と生きまつた大吉湯之湯

魂とあり身と月ともゆうすりとの事こと祭儀まつり天玉案あめのたん我よおへを
タヒトキテアリテは神の塵ほこすり拂ぬぐひりあふを
思おものさかんをもねり 絶絶え候今する勢ぜいいづらむ凡ふん生う
の氣きは死死を取とすれいかすかふるがれこれと対たいし
骨肉おにゆはりのとよとよあはせとては成なる所ところ上う手て度たど
て是これ翁おきなて眼まなこの喜うれ喜うれ悲かな懐なつかとくにあれ有物うものの様ようなり祚みことの
若わきとくわいとれ先人せんじん處ところまきうけうち 実じつひきうめ
て是これとて神かみの御ごおとよその吸收しゆしゆ出入いりでりへすれども身み
ありて神かみの御ごおとよその吸收しゆしゆ出入いりでりへすれども身み
ありて神かみの御ごおとよその吸收しゆしゆ出入いりでりへすれども身み

りりとあくちのよしのひにあらすれ
少ひてふとあつけて鬼とはすれども體地にからむと鬼は
其骨肉のときからよあまて節乃事と考えとめ柄もね骨肉
のまかほの是がる鬼のよがうのゆゑへ鬼はおきこうわづりて毛髪
やうゆきへるはげすうのゆゑへ鬼はおきこうわづりて毛髪
毛髪りふじうとか居きようおえうあつて人を附とひせりうる
のゆゑへりあくへはめ一升の度の毛うつらをあすけす時を考の
或そ人とも物をゆかひりまきへり事ある
えん鷹あれう百鶴の毛うつらを鷹の毛とありせて烹ふ國へ松葉
桧うつら百鶴の毛うつらを鷹の毛とありせて烹ふ國へ松葉
神のあらつてとろとろとく神と云ふ鬼のいは成へ
わらといへ今般人その名役割とてやううて鬼ゆくと
名はすうひりまつてやううゆきられあ度のつて所
いはまことあらばりゆる精氣ゆくをわゆの事歟と

あらえの宣ひへやううてりとをやうじを考
遊鬼まとぞこの鬼が御城とふるすりゆ度を鬼神の
情状もあくゆくあるるる鬼神の情狀とゆふ爲たの爲體
てやうかれられと考へ考へる人の多くなるするは陰陽
よりの氣りゆくまほれと考へるが爲れと人をすと
考へてゆく解作と考へるその鬼のゆくゆくの形を考へ
名はくとの御とえゆづれとくゆく伸れ御體へわれ
つるゆるゆ神と骨肉うれづれとれりと多めの本方
がう教へばまくあれと人鬼ともあくゆくと共義をよさず
考へ事にもあれと人鬼ともあくゆくと共義をよさず
べう考へ事ともゆづれの河海の水とこの無よ寧むる

あらこのおとすに一水たりまつやゆをねうるは
木本の河渕の水と並てはみ波より又一水たり
そのふねのまゝ奉すましもひかづれ秀の鬼神
あり極といふ陽極ありとどり陰極とて水をさす
トニ五体の筋骨あれ筋肉の筋脉と筋肉
一氣の根柢より本もろよは氣肉の氣肉の氣肉
肉もれつゝ者すくの氣の生すがくとく
りするあの人全ちよ一氣の生ずる廢すりをく
この人全ちよ廢すりをく一氣の生せ
氣をう一氣と相成すがゆゑんとくはきの入ぬと威
一氣とくはきの入ぬとくはきの入ぬと威
うきじともゆぬれをく其筋肉のあくびうの手筋乃第ア波
うきじともゆぬれをく其筋肉のあくびうの手筋乃第ア波

又うがや一せ牛の性のとよあひあひ、寒うつ取へるうり
ひよ温うつゆえ、熱もあひひ浦へく哉、鷗を西く春
りうあひて有うり、行ながくわゆくうき等、かくはくに
庄へく、休ほとく。医の業、役合す人、君臣合食を、これ家
一休ほの方といひて、ゆうり、食すりて唯一、繩の湯の繩れど、何きう室、浴
ソウキ、温熱うるおすりて、从辨みだらへ、今もれと接つゝくりて
ひそ、心ゆき、きいか、やく肝かん肺ひ、行ゆく嘴くち、そへ
き、肾せん肺ひ、肝かん肺ひ、行ゆく肝かん肺ひ、うの類
とそく相感あいきん、そくと行ゆく、うの類
その鬼魄おにほは常つねま夜よの、石いしからくわて、氣きをこそ
る、氣きの、よきに消きむ人ひとをうつて、死し、歸き

是の如きをかうとつておはしゆくよ後を痛うて
かへる病まつてふゝもとまじ薦さりやうきそつを失ふ
よせぬれをくらむと仰うておのの難へからかの如きの
分と娘うへと下の被とけんづけのふあくみ
あすゆうはまもわらゆきれひきんやの
被と用うへてわらひとひきは意懸けり主とまつて桂爽
あらきく御ゆうじゆうひがれどりうすやかりの角よ
おまえ鬼を射す財く射まふ射は射落れに射度よ
射弱れれれれよと射す鬼を射度りてはく鬼
形とうて強りと人を食れとの勢すくうめ鬼は
よし骨れその春厚と云鬼法 云度のひくねくま
秦襄のまく鬼魄すくふすれへおつすれへおつすれへ
うちまく

まより花をもて來よ。其鬼神はひづれすうそれをもとて天子
アモ富の海の肉となむたをす。事いがあわの船と舟ひ
さやすと尤有りとひら角。稻子神孫七兵の様に
らやぬければといも天小まみの神。上帝の御侍より左をセ
き弓弓い御下。天子の御灵天帝御て天帝御作より下り
く。いのくそこの御作不吉と申して。御まく今へり
ゆの桂と申すとおつれをあきに寄ゆり。その鬼鬼をま
いはよきよきと申す。神の在す。おをよひき鑿
きる事ありて。うきあて。其鬼と申すの神七帝より
うきの申の取す。かくはよそわくやまくは其廟へ祀す
ま。宗廟の禮うち祖の廟八百せも。うきは其廟へ祀す
て。にはよられしきもん。うきて神とす。たゞ五世を祀つ
ふる七世の御ま

多大川の富と豪華なる明りて、天高め川河岸のき
と多くありゆす。とハ上帝が居るより、帝國ありく
日星も高まつて、天子も小朝り。また之はれ、一月の下、一月のうち
ありく。天子は御所を有りて、天威を顯れたり。又天子の
御所は、御所をうの外の主事事務を司る所也。御所は、御所を
天子の御所なりと尊んで、御所をうの外の御所を
天子の御所なり。御所をうは、それまで御所を
あくまといふ。御所の釋義、以て御所をうの御所を
御所をうの御所を、以て御所をうの御所を
本居宣次（朱子）曰く、「御所をうの御所を」
その本ト小ト有れど、其成道と、御所をうの御所を
ありふる。鳥居鶴（朱子）曰く、「御所をうの御所を」

トセイには鶏の毛あつてありてはりてからむる者
と中より肉と骨との鳥をもとすりてうそめ
をとてうそよ多事なるに於ては肉と骨をさうへて
おもひゆくもとれどもこの形とおせくもとれど
鐵器ともとあはく相手に落とす度その難もとが
も甚大と母ふきよとぬけりかの難のちくさりと
もととしとおもとがれまなびあへてうそり
ゆふりてとてうそりあらわづる事一きりをうそり
おはをもハ似れどその形事の鶏めぐらすと
やうれいとおもとがれゆつとほどの鶏めぐらす
くも湯の橋をゆふりゆすとねどうる地ぬきあひ
まうりとつまめれりうそり墨跡のひかの鶏と
かくまは事とうそりとせりひなかと彼はの部とあれ
くふとく共すもとあはれむととのたまとの中とる
出とみ縫と色と形と似るのみうらんとあらの馬と
もちりうそりとめりとをかにあをとて行うも
とめの御とそしてその後はのとて誠りうそりとせり
くもあふゆうにゆき魏のま洋のとお主の猪備墓と
名乗る。蓋の王のうせの孫吳綱の容の主似るとこそや
沙き漢う魏のあまを房慶の財梁の鄱陽王の武帝百十の宗
墓と云ふ。蓋の蕭顥士とく王の形容と似ると云ひ
百附年もや人の子孫とおせの後からくへ人の之根先と云
くらうのあつとひくの仰きハお鶏の事うじふる
其鳥骨をうるふとうそりとあるまく。五段ノ二三

傳の後うめめ鳥骨うと相せう事も小道くと
やりくよ寄くとほ御の神とくと鳥骨の候すと不意に
とくくぬは人の神考の精神既くほゆる候れども鳥
鳥骨をかみのたの御うけられかうまく玉孫の精神あれ
くね考の精神あれふ孫その誠教とくとあうちくま
の精神うつまれて神考の精神あり極むにうかく
漢の武帝の御府あ東廬の傳ゆゑくとく座くと
すり坐まとよやしとちくみやく坐ゆと向をみひく東方朔
奉一扇でそれ銅へ山の子すと山を洞ゆとうけ移る陰陽
の卦卦とさりとりすとゆあくせくれぞ金一山のう
くと扇くとあうりん易ふぬ精神小なりモ子あく本邦と
ソモ松の御うきを仰るゆりのうらわくとその御うきと

トケリりりうづうの内、南嶺の山前より辛夷館室を
奉りて、あらまく洋服のせゆと二衣うしれの烟山を手に
うまくのびまくゆくが其一勤の感すとお世ゆく
をうまうまとあうてそれハれ神を非常とくと神を
船舷と祀りすとしやく族祭小ありゆるよく神を
主徳といひすと共食と高き事ゆくとすだて云艦
と云て大とくんう陽極とゆく多岐うんとする水
太さにゆくとくらうとく一族祭もありゆるそその氣あふ
そそお處すとさかねあうつ備ひくとく又後かまく以
孝とあくまのあうりのとす事も濟りふけの支の
孝承とあくまのあくまふ苦人滅鄭とゆる是ゆくと小哀
人歎の國とうりむかくとわくと哀の公と云ふと

乃君の外孫が此を奉ふて海
減もの通すと云ふ事年より高の女鄭の夫人とすり鄭の夫人の甥成に之をす
すむゆり花寢の事と云ふてはすとしり外孫もろよ
書く事とせり是後定と以て夫婦とも夫婦と先儒の事と論じて北溪
夫婦と養ひて侍とすり鶴と侍く事とすりやくわきと云
ふと夫子と鶴と侍く事とすり鶴と侍く事とすりやくわきと云
夏の鳥玉がゆ後うと射とすけり事改ま千鶴年あらひ
うと夫小ちりと云ふと云ふ事の後元の事と云ふ事と云
うと夫はうと夫はうと云ふ事の後元の事と云ふ事と云
の後と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云
夫子の夫子の夫子の夫子の夫子の夫子の夫子の夫子の夫
うれ喜ぶ事あらはる事の事と云ふ事と云ふ事と云
本その事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云

ちまうりて其よつよみれよひりくさうす。本うる人達づき
きらえんりとあくわを被はひ。れす下。鄭の仰
有う席とあうあがはる産のはく。御よもじと。かの子良止
とまく。事。故へれど。その事と。まく。事。小
ちて。事。わから。まく。事。かと。かと。これかのゆすり。ま
かと。ひよえ。かと。まく。事。人の後を。もと。もうれう
入。外と。席。ひかす。いふと。ハ。男。海と。女。産の。骨。や。じ
時。封。原。す。こ。事。て。まく。か。仰。有。こ。と。に。ま
自。す。と。小。鄭。の。産。の。宿。と。穆。公。の。う。國。の。卿。と。政。小
う。す。か。と。既。不。能。そ。の。宿。ひ。まく。よ。節。まく。そ。の。亮。鬼
より。泣。く。旅。ま。し。と。小。鬼。魂。魄。の。あり。と。あ。あり。
かく。そ。の。死。と。あ。う。

ひるまう子のまへ まゆすらと紙叶へれども人神
のめと詠めあひ 小うれとみうねよてゆくぬぢら
タゞらそその笑やしよ仰あまうとする度い鬼神の度
也とよく御心と先属とゆく譽そりうんへいうち長く
あく天年が度き又年ねさんかくあぐく痴
痴もれはわくたせらうと記を考不すれりあす
わうい面はり人威津のをみく痴死 或ひ、暴虐の
人刑痴よりて謀殺やられ或ひ肩引けひじらひ教わ
る者を或え冤恨と抱きておもむけにびらひ教わ
ひ、暴虐を行ひて忽ち殺せる或ひ婦女乃ぬく恨み殺
とつめうぢうひは傳道の替りに精神とてよるお侍士
とくふくね精神とてよるお侍士とくふくね精神とて
そのおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

仰有うきとひ強記とひ病氣とひ渴てらへ水解て九郎を後その乳
散すりてひぬとひ泣きとひ泣き肺喝ひとひ代の胸あひそり
もひく疾とひ嘔とひあひの屬とひ疫とひつづ
ちる先秀の禮小天子ハ群姓の角り小奉屬とれどかひれせ
諸侯を公属われのあまし族屬云う士庶人を豪親の邊ひき
りあとまつれ半三れそその鬼の歸すり膚にしきる骨ほ
音あひぬとひすまふとひすまふとひすまふとひすまふと
放てハ明よかひれ漫民かひづれふるい是かひけりと
夢の寒小生野い靈れりけと見せりは是れう人死して居
とすす本ひたとひとまもいのあひは娘とすすと

所とれどもアドリふを今よせよ爲めに歸のまこと
も執つかひと城がりぬれりひき人と慕ひ人と恨む
佛よりうのうへとすまやまのまうりふうちしる今夢
とくはまのうよひてトシルトシル氣あくさくえ
先だうりきる乍生のわあらぬ草ひきく共に
ちふ歛くそつ外よ死すとこ死らあゆくゆく巫羅のと
ほほの巫羅のとよ作半の左道とみて人津まへりと
死をかずみの附こたなた死神ニえみのほぬ岸いり
えぬ男をかづひく死神すみよとす
死の舟をかづひ死神すみよとすまは人のね千枚と
りとまつまみあうと玉神と打ひやまかせぢりえ
りふかづひく死神すみよとすまは人のね千枚と
平生の本源をかづひ死神すみよとすまは人のね千枚と

本傳人と老子の宮中よりは事多きと謂ひ奉る先
をある宝庫との事にうちとも思ひより同る遠く史記
より多くありて多く收めよ故づくの奇鬼あれよ拘らも
又うら男かよとなづくもの法鬼も既よ捕らもりうり
冥半子アマハナコ乃より男鬼オトコガキあらへばと申仰よがのの
乃説ナガシテひきひき男鬼オトコガキあらへばと申仰よがのの
うみの類タガ天地の間アツカニあらゆり沈黙肺魄シムモヒバクおのゝ類タガ威
しきの人のなかまミナカマせよセヨ柱ツブとちへよ爲めめう人の
そひとわその宗譜スムジと色イロと氣エビス和ハシメと謂スル妖父ヤウフ
うちともれこ人ヒトありリおれ妖母ヤウムとさうほえをう
清キラれいじやれりて或オトコすらスラい故コトを抑シテるやゑよ
の娘ムネコと年タメおれり御ミタケうちされられらの事モノあら
身カラ病クモリ年タメおれり氣エビス事モノとその障マツシを

うれしき唐の貞觀のよき西城波羅門の傳來ありて人を覺醒
あそぶがまつからず多ひす半の事に大文令傳奕
と既坐する乃じて傳奕を是よりて至りしに被傳たるま
生すもあれど是れが事はく汝得するを可
みかの御心ぞうりりとやられ又いのをへかすよる
身の付はれて風の轉へるをうらやま
てきのれりわざうの事のよもよと有りけりふれ
うひ人よ馳てねりひかるすがとせむるをされ
却き詔よりす詔とは氣の同
その神ありてわづかに感するをひそむて夢よみあ所
ありまことうび詔すゆふね詔りゆく身一詔くれば
かくえふまふ詔くまうて人眼とあらざるも

うりやん御座ひて詩を能ううれとせん眞伝の詩をせりゆうとう
まもくはまちまちわゆとりむかひゆくい奴婢の昇殿
まもくてアヘモウリテアヒヤウリカ
する児童の幼時
却されに病弱の人々
叶ねさきの類くこれ等の人にされ衰弱く鬼病あれをも
鬼病くこの余余全かがりんの骨の合とこれらの人
力と筋肉がもあらず可也の物修て疾とする事
あり齊の公子彭生う焉くもわ類これすうた筋がりき人
よが本いきゆくこ人乃想よどきと威^{アシ}侍りけりまほ
急切うてかの人にかりまわらわうびく人多そにとくとく
そのああやまうて舟うちて水洗ふまうく金山
すまゆゑて舟と清てちキノ跡乃いとまくらかな女を
ちまらよ下部ゆきうて自ら船をまめの處行ひと

ソシルがおせりばのくわきよりてその意をかくこの世に
進み此のむねうぢにとせば人の罪とあらうるをくと
うの後釣する翁の事と異てあらうぢと云ふがうじと
あるまうかようひせうにせう信れやかとつまくでよき
よとあらわゆきしもて物をあらうこれの下部
のえのうれとちきくとくの切手ふうりとがく通す
相國（本のよきよき）にうねをうそ（経末おほせ）まうけん乃まき
圓（まつや）わうくわうわうのうめぐらとそ人あの篇とく
望のやうかくせ一車のあり一とあらうがれとがくとまき
せう他のもくとて唐よどうられと翠（みどり）のよ隠く佳良
くの男よ出来と若けり故里小うゆきまあれやく本とひ
はあて只酒を一ふきうづふね松（まつ）のやうと人の

多すとわへと圓くふまき一きりまのをと自す
てふれゆりぬりはくとく一翁やあくとせうくや一と
おせ一車向くとさひはいきんふくの壁のやとぞく
とそれはうへとねひゆきとそしゆるうば
りゆゆきとくと教のとくとそむ壁のやとぞく
釵（くわ）すりゆき事は本作くほりひゆくとくの本や
ひくと色のこときいやを亮波人ばうじじぶとが
うれゆきとあらうとそしほくゆう経子美原はくま
り思とうとういとがの人がとせり人よも成えゆ
よと本とほんべとせれゆとせりとす経ふくまゆ

これ伊氏の事は、或ひ弟カハ人リてはカ又人トアリあり。し
ラムナカタシナリ。こゝとテナカニシテ、萬能寺の教をす。あらじ
それ人の天地の間、かづくといへば、泉の水す。やうるが
勝よさうか。是その力とほうる水す。やうるが、ひの力の内
如されまく天地の本氣と天地の寒、ふれとゆる。とみば
そゆる。蓋す。それと以父母の本氣からう天地の氣す。そり
れまく天地父母す。一皮こもると、人死とハ
罪と仰り思ひゆふ人とす。りんかべり。ニシル。一か年半
3年とく。これのうへや。さあらして天地父母の宗とく
ちとく。かく人と小天地父母の事す。すうとけ。おれ
衆かくまじ人とす。じよへせの人らしく。清澄古氏の代
乃人の事よりうとせり。りと。のせよ。りと。も。暨古氏今後
叶のを

天地生れ理つてあらむ。皆人地とぞねとす。も
甚だすうらき。幸ゆかくの。とく。い。羊祜環と記
晋書。羊祜五采の。とく。を。たわむてあそひ。金環とあく。とく。を
小めの。とく。ね。の。とく。を。羊祜諸子。李氏。家よゆかて。東の
塔。り。その。秦の。事。中。とく。と。き。れ。李氏。か。れ。う。き。ば。の。とく。
鮑觀井と記。とく。の。李。の。とく。と。き。れ。李。氏。子。羊。祜。ち。身。と。く。
ど。く。事。と。く。と。く。と。く。と。く。と。く。と。く。と。く。と。く。と。く。と。く。
され。往。合。セ。ー。と。く。と。く。と。く。と。く。と。く。と。く。と。く。と。く。と。く。
蜀の。諸。葛。亮。の。は。力。と。唐の。崔。氏。の。母。を。
武侯と謳。せ。が。う。の。崔。氏。を。ま。く。誇。る。蜀の。シ。と。ま。り。を。わ。と。ま。り。を。
花祖鳥乃弟。芳。主。と。一。宋の。花。祖。鳥。の。母。萬。福。寺。の。時。鄧。鳥。主。と。一。花。祖。鳥。の。母。萬。福。寺。の。時。鄧。鳥。主。と。一。
う。活。節。と。あ。れ。李。諱。と。相。子。の。と。く。利。明。の。と。き。と。原。の。王。德。
西城。わ。く。と。曲。と。く。と。せ。り。人。あ。く。と。西。蕃。の。俗。の。足。を。一。
その。裏。鬼。い。ま。教。せ。下。こ。の。鬼。の。力。と。消。祀。せ。下。と。

ソレは仰るもあそねの性盡なりのとくわよ國す
うふらはれはれの美うりのふと見と相ふよやくまといその
御がとうすゆうりはれのとよやすたりすのいねやくば
まうて壁のくづとく汝の心の轍と傾ふと仰くまく
駄ちやうのあけの日その薔薇園とすけるかの女の形を
仰うきとゆうからく立つてこれをもじりおと
少翁よりおおうりへ茶中即ちれどみく茶葉をす
修價かうし買ひてまあとりて琴の絃かうて洋
タクそのとくびふめられう茶葉茶葉をすくまくおなまを
追てひじきの香ときてあれ寡女の糸おとこひの糸とひじ
と賣民森林民森林と仰うれの女この香とむらすもあ
をもく茶の性の臭うりがよぬよあゆよ威おどきよ

人ハ百物の盡うりのとぞれにそりの程人のわへ
かすれくるはくはくと用よ御あとくは耳よねをとまをねを
飲食うる紀唐の辛からきとくわくは情じやうありこれ脂膚の
子のあとうくはくめられてうその山さんの國くに也
うるわしきそりうる夫めはみの中なか兔の肉にくと喰くひ
生薑なまごとくゆ本ほんおとし本ほんあう生薑なまごとくはうま
子持こわくよも詠うたのくわくじゆ兎との肉にくとくらへてせう子
唐とううるわくそりうらへくしれう子は成なじ唐とうけあ
ふく持もあさうそりうさまくみの強力きょうりきよあくにまく其
氣きよ威おどきわくうの多たくた御ご茶ぢの毛生もいふきの色いろの茶ぢよ仰あらう
御ご人ひとの所ところでふとく取とれあさんとく附つき其そのまの
れりうははうゆふれて放はくとくの事ことをよ放は

そひたらまきはりにかくちと聞のうり小溝あるとき海よ流
まくらい河水のせこらあくわくさう一ゆよ海のわくさう
人の死つる付もくめ女の侍りく三入れてまくらまくら小戸の
うこよほくくせよ多うこれ共あまらきこすりまく
スアシホのまくせ、歎うりとおとせや年たててほよその
セ方きほりうとすうこれうづれをあとうけー娘がの
力鬼のよじ小ぢりのえとくらむすり年月と小長ーたらま
ちと成じる事ハ内く教へ事のゆゑを本ほそだり
不夕の宇姓あくまきとくもやうめ紅きり蓮の実供
あきひ綻瓶の中とくもゆれは先般成りく時々その
多者一年ほど藍の葉薫められ花の冬本わくにゆる
トおれで人とされ人死とわどあるとまよ人物の氣

のちとひふね成へわくとくわれの程うくまはま
女子の又あひ作丈丈の女子ト化一男子もとふと
ともの娘よしむ丈侍よまくとくもくとく又人生の虎
ねと牛猿虎と狼とくとく厚の王又亀とくに夏の黄地
ねう李勢あれうれ死とくらう廢とくとくもあすいよ
くとく化くらふねちやーとれ各自これらは詮湯承
亂の事アツス不吉とく國家滅亡の兆の承とくろ
ちと呂とひもくにわくとく夫子の諭とおひをとく宿主と
おと男と女とをと女とをわす事ハ漢の京房と易傳
女子化とえまとまことと陰陽といふ賊人王とおと丈
化と女子とねうれ改の湯ナ物をう顧咎とぞふ
とく留化とせとわるを宮刑の證なると女化と男と女

婦政の行ひるをうとてろ又春秋潛潭已小の女と
化すと貴人位する女の事と仕人手とならずとは
きへいりへどうこの本とじとくへう約主のけと
周の文王の平年と武王位は即ち主とへえ年と
女子とて化してまたかわるとへ竹書紀年よりそく戰の
世魏の襄王十一年とある年有りて史記世家と載せら
まね漢晉唐宋の世と本ゆづき深のとき人骨よ二入康
子と蜀王成都のあまのかくをわるとぞひて國公
ほりゆけりて華陽國忘ふゝとぞのうち漢晉の
とよし宋のあはの後明の階す年中とその年ゆづ
一人眼入る男ふれ子と義と年宋明のせりとその本
作り字よべぬ漢のとことうとす年ゆじにこれ明け
此の唐の司周文襄小かと考る丈襄也と者よりよ
ゆ軍慎レジに本もとあき今の人男あらわすと
女色ううをひき勢ひがれりくく有てきめと
じひきこれかく活裏せのとせ國の犯され京房う古
のとよき或りあやまつ角くす天人の意よとせ達くじ
後篇の妻ゆくふくまくとすやくお淫のれた化
高婦人と成玉墨の者へ化て猛虎とくる心の變す
と病変せんじよと持すよしと譚氏と云墨客
のとあるわが人よてしゆと化せるの婦と食欲のと
よきのと人よてしゆと化せるの根と化せるれもし
おは修よ形のとてしゆと化せるれもし氣とよ變すと氣ひと交
育すと氣とよ變すと彼大ふ氣の財を大あすと

その害よりよきにわのけはくわるゝ人ありひと
もれらの難苦りうるゝ事いぢりよこれらといふる
とあすうるゝは御子の魚也著の渥嶋が牛浦よ
舟底やとてこの廢水もよもとお族のものと
うことなく床と船とこそす小島くのびや
族水ようかくとありうるその夜の夢よ人あつてゐ
道うそうそんぞおりき相かねれんとはとひうちみ
てうるゆ生海川をうらへむ竹ちるとへゆきとれと
えめかじかはうどくまつはくらしと張面行のひと
えんじりとやまとそむゆきこれらの人々は人家財物
そそぎやし実半あつて鬼怪よあらひと人鬼の怪
まつこれ物たりけり一美子の陳蔡のうよく

うきを浴びてゆく御入力の長ナカ人ほうの男
湯鬼がとうと寝たうはと入浴して叱りふの声と
ひづりゆく侍女の人と劫ひて貢すみてあ
かめのきのよもと宿よ引きて御よはゆゑ
ぬまと夜内引あまかよ勝ちんとがゆゑ
うれ大ふうめがきく足をゆく彼男は津屋からう
ちよあらうとゆくひよをもひつてよせとくと
ひづりとおもひよをもひつてよせとくとくと
ちよ成程渠のたんゆうかうもりうあまみるにす
かくじゆのよもとあうとおきくゆえんれん群乃經
うれよおと後六萬のゆもと龜鏡集鑑草本わむき

とくもそぞくよりのへ詣れどよもくは妖怪とす
うれを乞ひ五角く、五角くはみ行のかへとまちねり
内とひきだる者をうめむ先祖神を物とす。ことを教せ
するもじやしそれをんぞうらへじとぞかうゆひす
據井衛波侍おもゆく、萬とくめんすりほくされをあま
あやとめれとまよすすう御、御もとめせうそりうされをあま
五行の氣とくア一類若くとく氣性とくす。まのすり
きとゆくゆのをものふしに人の元げきはと
かはりのや大寧の王に従う達也二百件某とくりが至
ばらくさくすうりと仰はとて従う。長ニ空ふかくす
さく白く晴紫の絞食のりの前くわくら小被
くもゆくうたよ一月あくと空紙とてきらゆきにと
はまくさくう縫と縫てかくまえうづらへとくらゆ

ソトとちくまでの柳れれとくおとくのくとく
ねとく所よけうとく正夜せりんはらひあてじれ
かひうさともすりとてしよひがゆしきとくは
よゆうのぬいよとけのその縁のやくまくとれ
かまび酒と研と縫の草子をうとくをかくとれ
るる小さう鉢の草子をうとくをかくとれ
ソトとくあら旅とゆきとくとく旅問とけり
わすりとくの今とくとくとくとくとくとくとくと
その取よとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
本約のシテ人寧て天狗とよすのふたりとくとく

往々、夜は鬼作といひものばかりやとふ人も見
りゆめうつよせの傳もこれにくるりの大約といふものと
てよく修業の高僧の多くあるまゝ修業、佛教を上る
鬼属をみて、鬼星くだけば佛あやう佛を
すれど一靈鬼なりと云ふはれ、尚書力すとま鬼
者と行ひし人鬼のためト格セシ事ともあリ。トや
さき種ともち、一の事もそれ以て半もわざとまく唐の
西蜀の國にて佛寺に大會が設け、少くの尼姑
その中より十歳未満の童貞の少く者を率て竿の上をまく、唐の
あすり寺人等を亦つゆて、飛とまくうち、たゞアチャ
鶴ハクにて走るものも多くて、やうて走まく者、本やまと
ひきあげあらね日の後高さ塔の上へめじとその丈母

スのまぐりのりうこして、晝も夜もまくまく
こそ所ぞ詮僧も人む地むきしは佛寺の壁に絵ひけ
れ、天夜叉のよきのわが、いもよもとてこの辺の肉入
らんのりうくのりあくひ飲食のねとひてひく
とひくより専書教説まで仰り、飛天夜叉みだる
鬼のかげを翼せひるすのぶや、佛寺を夜叉の筋に角りて
夜叉をよく幻術ととある天狗のすまゆ、よ九似あり、あれ
多く山林冥帝が生すところの本石の怪う一休異
記まで、一部の山都山明錄まで、本審がりすの書
ちとめつてまつまく人のとくしてまくの丸鳥のとく
はの山ぬく紫けくよとめすそとく昇りて
その承うかとおきつとよれりせたりふ天狗はく

山にやくぬを嶺南の山並に似て 河原雜草と山梶と云ふ
日向南丹芋まち地の聖安野場に似て 須々と博物館野場
河太郎といひの、宋の徐積、盧川の河のほとりにそぞる
此小児は鄰翁 向澤園にそぞる。其のねぐら海小僧と
よめのと南洋の海人から僧のとくにすこぬ小き
さうりとくす似て 竹は猶まとりす金華の人は都
仰よ猶三年かはなく人とすどりとし方於て雜俎
々神とすもむ戸子の地狼蔓目折志の買ニ書より地帶
白波島よもや本の桂と薔薇とひがみり草、柏の心
をとふの柳とくえをとくみどりへくあうて煩体と
たるよ申日南夷方の盡毒の半ノ似 毒盡はかりてこそ毒を
人あふとしそのういひあわせよの半よしり下をよわり

山や圓鏡と鹿皮、毒蠍と沸くとくはまことねうへ
えうち今も世より外はと傳す。人乃妖物と役使する
とも活潰たれ物佛とて巫蠭の類なり。世のわざ
少くまことにかく、机魅とて多くありて祚がまじて
きの半井とて身から嫌たれたり。ひくいぬあり
ゆううまくむし狐とつまうじれにれくらふく
狼と射うせり。ものあまうの精れどりぬやけよう
つたるに沙汰ぬトモウ 大病院經度の御内院の
象取す。綠草と鹿皮カシカヒ とけうじとて在と云ふ
といひてさか手をつゝて、夜にじり白毛乃剛よどり
て勇乃すすり家つづりみあひて、綠草と鹿の
のをあふ射られて死りと天帝よりうそてに與ひり

おうふを抱うる豫章何の形かと云ひて伍子胥、吳王
から卒あらずせ——言葉より出はゆれば御内臣
なり「故花楚辞の注あるえども豫章たちの形はすまづ
きくへじる所の神のとよさにまたも極む形をうづく
多くは豫章の形をも極むる所の形をうづく
多くは豫章の形をも極むる所の形をうづく
つれぬとすとさう殃れ毒地の人などと人災をもん
を身に負つたる者ありとよき豫章の形とすと人災をもん
祀といひともつても圓祭りとぞありとすと先主の祀
ありとくわが物をもうるは神とすと内なるの陰
祀すり淫祀の福かと云ひ曲礼李氏の恭い旅やと
夫子のそしりとみひれ年方程りとあつま江淮うち
南とむら淫祀とぞ唐の杜工部の淫祀一千七百

區と云ふと極めて夏の鳥伍子胥の二廟と云ふ豫章唐書
の本傳と云ふ一派すあれ
松木の枝すうてを祀すと伍子胥の廟と云ふれ
ちくへく次伍子胥と呉國の地とぞ引廻りと楚國の地
より江蘇蘇州の伊川の程子論セキモトもばれ
よきれは宝祀新詩かとす靈應ありとひつよもやそ
の神とく是すうい行くもあらんつまうり志穂美あ
つまうてを立あらまう範良至社大王のとくあら種子を
じく湖南の人田の中よ個とりよびて摩訶うるを
道ゆく人のあら磨事とその洞あらゆりもあらうる
くじりのとあやくうるをほあらーとおりひく
その産めのほりえを川とねー範良もとと組の中

（アーリニア）の下ニ魚
ラサトハ文
ラナサズモシテ
セレ正字
未原書
ラミズ

よれをせあきらむの内ゆうて艶寒のあ
みの中よりぬれてこの。まある一トトヒナリもソツキマ
ラナサズモシテ
セレ正字
未原書
ラミズ

以物競居多きをあくせりと村の者とよやまふ
内くいゆつてあれとこの御作のめくみよし不がりと
うなづねく少社ちよ小作とて賽の神
のれと汚ひとすまとふうとまきと年もわづる
七八年月と経て、の艶美のぬ。うなづねはくすとて
ソクホジ作のくきあくられセタフシとくさあ
ソクホジ年一艶美をうけりあがひゆ。それくわく
立ちかくわくとひきがの是故の半とおきらかに

止より魏井入芦浦より示とす人方ちやくがくわす
く角びきりて樹の枝りかけとるくわくとす年む
人ちにそらく色とほりすす人ひとくにおくゑ
四くる人皆ぐのとくす角よわりくの角翁百
千ソクホジとくに何有のましれす草鞋大手と
名と題てゆは童よ達社とたゞとくまづばく
小靈異とねくわくけ被りてうらふりをうらへ
まとすれのうのうと聞くわくよざよざよ誠
こおまちはくまのれセーうのちゆうつま一とお
ク五難老子の道とありてせん活りうとうの名神
まらじくわくとし続の本萬いふ事よ南軒張氏の山
との滝洞とてあれ高その神一牒するが文かと

うの日、はまほはまくらむ室の名をかゝるにこの日共様
まくわあ脚きりまちよ軽てりとれと轍たま
けのせきよゆくわ洞り入てその神の像とどうてう
らるにうち股のやく金うりよまじの金のうる金の
てねまのまうち、まくら金の中よあさりゆきまくら
まくらととくとゆてゆよて金うり一つあたのはまく
おひはくとあ御のひへきらとこか小愈ああまこの
頬まくせきまくらめ神佛の像はまくらす清江
巫祝の類森地の翁うの性まくらと靈あるとうて像の
中よ金うるとその天はまくらすくらわのまくらまく
うの回だらあ御の転へいあるくの神とまくらんか
いじかく裏改るまねぢわくまくらに神前よまくら

まよう隊くぞまとこあひ金うる金の朱
モニラウの本成論へてまくらく民よてこれ演記
まくらとみ理とよく信せしむ鉛ひてまくらすも後
まくらとまくらとまくらとまくらひまくらの民旱よ
病疫よまくら神よもてぞりうむとまくらまくらふこ
ぼうすまくらとまくらひまくらのんを深
まくらまくらとまくらのくぬくもよもておとくて送
まくらと角の角うくまくらの首とまくらと角一くのまく
まくらとまくらの首とまくらと角一くのまくらと角
まくらとまくらの首とまくらと角一くのまくらと角
まくらとまくらの首とまくらと角一くのまくらと角

うの靈魂是既に身に有せらるもれとぞれりとあり法
民トはトニテ是と以てキトニシモ身を身と以て因と定め
よくある事とぬせよとくある事とあせまーホの今を
表御用にてハゆふ小町ヨリハ云の四れとすナリち
ラハ今佛とはよも又法祀ト以て身よも佛を西城
化人ナリカクヨリハおづく天地也ヨモナリアモ
天然大神乃御す爾ハ靈華原の中は國ナリタミレ
ラウニシカレセシ少しつきナリシヒ
汝神
ニシテ九祀也ナリ
神体ナシ他ノくの神ナリヘテ
ウラハ御祖ナシト伊勢ナシ信尼トシル事モナリ
ミルヒテナリ大學寮トナリテ圓滿寺聖光院トマ
フラムの仰々寺ノ高塔ヒ奉する信尼の佛とは莫

ウルトアヤシ世の人のへつけふきふううち
きねりナリこれもくわい形術のうへよだりりのや其
名ナリ行ひて來るを身つらうと氣をもてせまると
寄すくわらみ民の義と本し鬼神と蘇て遂にナリ
行ひの者くわらうと身し浮きとひそけねトナリ
こゑれすくわらうとあらう佛はばゆもあらね
ひうれぬに民の義と本し浮きとひそけねそのあ
まもと傍りてとすやう一改りてうしなむ方をくじと
名をもとせざる力おもうかくてもス佛の悲願もあらと六
教の教祖とアヌウキ六教主九品の快樂とよきえんと
おもてなすがゆきよ高川高川を證考の折ふと存候

よ居ふ神と見てゐるゝこれより觀る事すゆべと權勢
のへよ媚ひ神（ひとも）ひとも力と威とをもととする人よ似る
へ一在にいかるゝい寿子の門よりとまよえぞうあらん
きりつておなほうえへる君わきらうるくよハ不孝の人
曰よ教よ其勞とぞぬよいと忠あるトトはす之ふ
佛ハリと西方の化きうさの神（シマツル）靈あハリぞ不善
の人のもの威氣（カミキ）有るよ世の人は常の心を積善の家よ使
まわう候事の事よ修業あつとハ能きどキトと奉
人の神よおふ希（ヒシテ）よめとすく人の福とくま
まうくれ佛の行ふ三世の事と云はばくとおもへ
すまくれよ人々の不幸から前世の惡報（アガフ）せむとは
くわじとくはをひかくに善報とくに爲すの事
あき人よ世の修業あつてこそがくとの事を辛へ
ちやくきの苦はのすぢよ處そんは後世あくに思難
ト陸きやかのことづりふするこれわきうちひきうて大
きとすがる後きう福善福惡の事いれ夫の事
つくる理あれられかひり坐としよれ候人只そのよ
ほの事とく候事（ハシメテ）これ奥うそと實すがる事
か前きく候事（ハシメテ）これ爲事と善不善事に積善のみえ
うち家とと上父祖うては五孫りゆうて中もあり
力高と仰歎（ハシメテ）事ありて事（ハシメテ）事ありて事（ハシメテ）事
きもくよ不三事（ハシメテ）事ありて事（ハシメテ）事ありて事（ハシメテ）事
事の事すとく事（ハシメテ）事ありて事（ハシメテ）事ありて事（ハシメテ）事
たゞの事（ハシメテ）事ありて事（ハシメテ）事ありて事（ハシメテ）事

今うの先をくわむる人をうむる人の子孫事あらじと
よまに國へせの人かがさよ慶ひて家百年の間
えもうちの事のどりてかの奉公と能ふとそぞんとしを
仕ひのあら本あらかうらゑあらすやなぐれお
きりつゝめ一二の奉公とちむしの者つよたうと仕
とねんの翁とよほほくへかうきと翁とひとせ
きう本かうきと翁とひと翁と翁と翁と翁と翁と
つれ大翁ともいへねへん已身もと上りしもあひと
ゆき翁と下りしりうきと翁と翁と翁と翁と翁と翁と
うきと翁のせよ翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と
翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と
翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と
翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と

へだ人をよひて、主の御内室をうて、人よひよひわ
よひぬへひよひ少しうへがうひゆひりうわ
ゆきよくせよ婿ひよく人ふてつよくとく本を賣たま
致へゆかといふまてばのせのへどや食ひるふされ
きう人をよひて、へ年、あひゆくうううへかひがわ
りうひれひあひへはくうあひへはくうとくはく
年ひせよ用ひうて本をよひうて金をとて、年充
つまひよひう百年とし公議ひやうとひばわよ人
と歎くへひへ人をよひうきひよひうあひうき(譽め)利う人の
死て百年のはうその作ひ(書)ひよひう高款よひう(石)あひう石をう
底(底)ひよひう(底)ひよひう(底)ひよひう(底)ひよひう(底)ひよひう(底)
ねくとしのせよひうへこれえもひとて人よひばの
さうはひの秋若のあひ候まうう候不老の家よ解説わ

とのよし本行あやめへきの佛の教ハ數少つ
もあはれり又母子ももんあかとすく水じて道に引
ひてゆがりその事これものうゑにうと利せんとする
うちあはれを善とて強めあひあはれするても
極とうくらとすくほほろがるあせはせの後と見て
若と経セシムヒムのねううの若衆の教と人の世
よりのい宗のとくすく鬼とくすくもひと焼で圖
羅十五月れ樹とくすく本とくの小あくに漢唐と
あやせはれやう史傳とくねり西城の人をそむ性
ちつともあざしよの猿も荷まといす人の所謂鬼方の地か
其俗ゆき鬼火行す性者うるわの父子のうじとすく
おじ前よすくよつうとひそく又はくもろくづめ

孟孫子は褐や人あくはあつきとくよふへき鬼と信ひり
かの肩よる立て耳よすくへるのと怖ううの佛の
けをてぬはねけくとくそその傍まくと草むら
のを立二世因果六道痴也おのされうの參のとくに
きうその近いとくいあううう人のえどもあはのえど
則衆生と度せんうきことうじ一誠さうて人と參セ
シ本ねあへ一おとくそうあと力ちやうじとおふ
と段氏のソヒン正く大病のとはうてよくば醫の
庸うう病とほすくそのうう一とくすくにうの病と
医せんとおふうな医のやまいあくとあすおと
お内にとくまとくあらわすやまのが金ひねのま
毎たうとくゆうと萬病をとふゆうととゆまよ新病

まし歎する所も何處へまよひてその方と跡す事
あらももすすきとゆうべきはあはれもあらず
茶のきいとこあり功ありおもねりばりつれとその
病氣うふる心へしよ止術極きゆくよ病と心とろ
よ活ぬこの手との毒々々々と薬せんとはあらも
その毒殺すよがくとハ根きりふ活やまひ
あり附のほのうじにまくすてま病氣とやうめ
くさうの毒をと小毒りうといざれ情すすゆ
無よやお佛のうへひづかむと教化と守護と善と
修せりんとひづかむと教化と夫教
少そ老病よりえあむねくさすとモ羅刹もの如えとされ
さくかげと利やくのうきくわざとをとまつされ

あらりゆまくまくひづくより佛の傳する世人大めり
の人あらざれを必ずほめある人をうきうきれどい
やう聞るのうきへりよしがれるゆれりゆくと行ふ
あらひと冲庸と經りへるのうきに行つてかの道廢ひ
きのうれとをよふる常の飲食と漏れのはのの
起居と付よすとては死人が生と養ふね道をもはれ
うの常のゆきひすとひすく日く小糸糸との
往すくゆくいすくうち彼輩の人多う共毒矣と
食をとせし上を天すう下へ大難すねふすといふと
ソシテうれにせのん疾ありてわざりにあらまことす
人多くいあらひといよの人にう死人のおえひあらはわ
らち萩宗布帛の田ふ用へきやく孝弟忠信の

外より見えず、總持書御祓のとまつて雅小室と
御坐て、お性力於神の一と祀を説くあはうか
ありふる

千時ノ年、年々、生辰ノ日有方。於於紙に写
み本、承衣嘆き、キ写し、自あて席耶酒
やま下二廻す。ますの候がく、御うらやあす
き、生えあす方は、済み、ひき、そなほの御あくす
う、京化の段え本あう、例え、ソト、レキ、うり、而、
キ、清き

薰蕕錄卷之四十八

薰蕕錄卷之百四十九

辯道書

太宰純

中村直道輯

儒佛神道の因異、而、論辨集大成、解^ゲヒトモ
主本解^{テク}ヒテ、逐一に、記憶^{メモリ}テ、かく、年、シテ、丈、
ぞ、又、心、疑惑^{モヤシ}テ、口難義^{ハラフ}、年、日、論辨^リ解^{カセ}、
奉く、紙、小、古、記、く、背、肩、無、ヘ、の、口、わら、善、言、と、信
生、き、常、に、作、ハ、聖、德、を、す、言、に、偏、經、解、^{カセ}ハ、解^{カセ}の、
こと、の、かく、うち、わ、と、ま、く、は、せ、ゆ、基、か、ゆ、く、其、の、こ、足
と、ド、シ、ハ、一つ、以、結、れ、ね、本、の、論^{タヌ}、や、く、ル、お、子、ハ、私、者、と、
之、じ、佛、及、以、主、く、思、ひ、き、も、し、儒、釋、と、對、せ、れ、る、い、る、

ゆふそん神は一つの道に立つ事ハ後世に至りて太
子の河小舞よりかくらが小神と云ふ儒佛の二
道に立べくして是れのことをやめて今と云ふ
わざより往かることを云ふて山海經傳
山海經傳の序に序に傳りア角く山下川今
と云ふ被波^{ヨリ}とは不思^シくもかの事無^シトヤ^シ
先不^シ傳古^シ考^シ一^シ神武天皇より云々大代欽明天
宣和治^シて、平朝小道^トりゆす本草^シば萬葉^シある
くもくじ^シ年^トニ十二代明天皇^シは空^シて死^シて^シ元^ト十三代
明惠^シ人^シ生^シる而^シ書^シは達^シて高^シき^シと云ひて云々十四代
推古^シ天皇^シの財務政^シの條^シ小度^シを^シい官職^シと定^シめ^シ京^シと制
禮樂^シ以^シて、國^シ以^シ治^シの民^シと定^シめ^シ之謂^シ代紀天皇^シに

始^シたまひ^シ 本朝小於^シ威^シの切^シ制作^シの事^シと云ひ
き人^シも^シされ^シ聖德^シを^シ謹^シせられ^シる事^シと云ひ
ぞ^シ御^シ主^シを^シ事^シ同^シ佛^シ小於^シを^シ儒^シ小於^シ農^シ釋^シ風^シ
を^シと^シ不^シ解^シか^シ始^シれ^シへ^シも中^シ義^シを^シ至^シ人の道^シと^シバ未
ゆうの経^シと^シうそ^シを^シむち^シと^シ通^シの書^シと^シくも^シ傳^シり^シぞ^シと^シ
法^シを^シ色^シ非^シ紹^シと^シくも^シ今^シを^シあ^シ統^シと^シくも^シと^シ
年^シは多^シく^シ海^シの^シ諸^シ國^シ社^シ從^シて作^シが^シく^シ道^シ
舊事^シ本紀^シより^シ去^シ太^シ子^シ若^シ也^シと^シ序^シする人^シと^シ
其^シ事^シと^シ人^シと^シ作^シするの^シ後^シ明^シ向^シて^シ
まふ^シも^シか^シ出^シは^シ以^シ後^シて^シ高^シ天^シも^シあ^シた^シハ^シく^シお^シ
也^シと^シ不^シ解^シか^シ始^シれ^シへ^シも前^シ小^シ如^シ儒^シ佛^シ神^シ道^シと
興^シす。聖^シ年^シも法^シと^シ太^シ子^シも^シか^シある^シと^シ

若実小をすむ言ふくひづ太玉の毒液もくはく氣概
而体のり小りじゆの行つて身くにたる文也而至國と
養國也凡今の人神道以家國也と爲人儒紅道
もとも一ツの事と爲る事一太守が修まての神
令をすす人の道の中にはまくに周易と觀天之神道
而四時不忒聖人以神道設教而天下服卷三
神政よりと始くは文小えな天と神は日月星
風雨の宿病を莫念和め教のめぐれ天地の間よりの
の力が不あてあらうとすら神の體の進化
をより起りもとく成就する以天の神政すすい聖人
の神道設教とは聖人のたまひもと天奉と社宗の
會紙文てけいはされば古の先まで下、成法もくます

大山川社稷高廟志多く以まんと神祠祭祀をして聖神
小神へ爲めやく事無れりと笑以禮もト算とく然と決
すりめさん何事かも聖神と改めて公是とくに人奉
以聖一と爲とすは聖神の初以ゆく事と成就さん
やあくは又士农子と萬姓以かく沙ひは(大唐氏を)聖
テ者小ても事小競處わざくがて聖神と假く教
宗を主とすむと一宣あくと聖人是承かくと
れども天と等くといひて是上帝神明と稱く號令爲
是聖人の神はかくに聖人神道設教をはきどり
造世理學を承流せれども小志をだはせりと聖神ア聖人
ヨリ神といひて一向に聖神と称り取はる人の良と
治る術と稱小聖神以迄とすは治神傳承却く

えりくに君すと畏り第一ト奥天命これより統
ひもと余ハ天の神なめく人皆以ひ御うれぬが故
君すを役者アタマにてくに周易が聲辭に陰陽不測
え禪神アシヒといひ洗卦アシハシは神也者妙萬物而為言者
也さうふ諸鬼神の妙アシハシく渴アシハシれねく紙縛アシハシ
以紙を天の命鬼神アシハシのあらびの何事アシハシ行ひをり
主紙宣人も知アシハシまづアシハシは只墨アシハシと號アシハシす者アシハシと
家アシハシ下民アシハシと教アシハシまづアシハシは公アシハシそかし民以教アシハシ方便
あくまつ鬼神アシハシといひ主アシハシとくに善アシハシくは義を理アシハシ事名アシハシ
初アシハシ而小アシハシあアシハシはアシハシりアシハシ勤辨アシハシりくアシハシ汝アシハシ公アシハシてくに
御アシハシとベ神アシハシを主アシハシよす人の道アシハシ中アシハシ心アシハシ有アシハシ聖人の
なりが小アシハシ神道アシハシと一つアシハシありアシハシとくにアシハシとくにアシハシ

世アシハシ計アシハシトアシハシハ仁慈アシハシ徳アシハシのアシハシと加入アシハシと速主アシハシ一
ゆかては達主アシハシと高主アシハシの佛法アシハシ通りて法主アシハシと
吉國家アシハシの先代ト教兼得アシハシりや小満アシハシりゆと是をアシハシ是
終アシハシ佛藏アシハシの家アシハシく仁慈アシハシ小行アシハシも其事アシハシて奉
思アシハシ不アシハシの巫祝アシハシの石志アシハシよもと耀アシハシと士アシハシも仁
濟アシハシ二アシハシの儒道アシハシ取アシハシりと一體アシハシの道アシハシと進アシハシり
之アシハシより半強アシハシ濟會アシハシとねくに聖德太廟時アシハシ人アシハシ汰アシハシて
事アシハシにあアシハシ今アシハシの神アシハシト神アシハシの行アシハシいわ神アシハシ加アシハシ多アシハシの
法アシハシ傳授アシハシもともと玄宗アシハシの阿闍梨護摩師アシハシのやくす
業アシハシと教りとも並花アシハシの道アシハシく神アシハシト野宿アシハシてハせざ
亞祝アシハシうそ鬼神アシハシに除罪アシハシすとく國家アシハシ小アシハシとく

けりぬ若よりが小園禮の春官に大祝小祝喪祝向祝
祖祝日巫男巫女巫の宿あつて、鬼神の東、ツカサト西也
此後家を天主す高廟被櫻以下の家れもかよ家の大
れも皆えくの職事ありて主役と務むは事ハ只事
鬼神小繪奉——祭祀御福キジヤウ成りふのふく別よモ
自行ク从其家へ在るもふそく因ル代の巫祝の事ハ
為テ有司とソドモ紙を考ふ所を核ハ安らかても大歎
念せの御寫祭法場師祿空神主紙す山川の而罷よ
御古物も主ぐる若ト今と叶ト要乎——異聞ト
本朝之後以隔つる家小主儀式名目はかりべく令を
而作ひきものち小異ナリと有す——或シニ子細々人情物
理古今同様也かふねば巫祝のたゞ在るの道ト云ガ

おわふて居すうちあね、ひらきバ鬼戯シキノやくよりゆと
煙エドモアミキ半もわく——ニキ事もるくタマシニ家シキの密に
トシぬすハ共シキムヘ於直くシキ神主シキを頼シキムば彼多シキ人往
せんとて左の玉帝シキ明主シキも是を服用シキムひく而家シキの門
入られ、邊せ小なく人シキ紙シキ付シキテ手シキ核シキアリおりシキ而西
家シキは御シキムは巫祝シキ少シキ別シキ少シキ一様シキなあつてシキ常シキの道シキ、
今人シキ神シキは紙シキ付シキ、不淨シキアリ、又シキ肉シキ小神壇シキと仰シキ
い御シキ御シキ神シキは紙シキ付シキ、不淨シキアリ、又シキ肉シキ小神壇シキと仰シキ
神シキと清シキ、御シキは紙シキ付シキ、不淨シキアリ、又シキ肉シキ小神壇シキと仰シキ

而の神明々佛家より其事小て其の神明を以ふは
あらうる事の源流を考へば其本根の國度が國
ノハ死ノく汝等事と云ふ事と肉外清津と相清
淨也と云ひ其家小野惣と號と塗て善耗以求りたる
號は其清津と云ふ事は法義修止而以神道事
主爲肉外清津と云ふ事は物小て其事と今其神也
リハ唯一ニ先き之でモ皆仁内小手つゝく社體也も
タナク其小手つゝく佛道ニ歎す加く其肉は一段も
其神也うかく車中たまひ無事のうち其小
手の近縁般底を御の事より取て安らヒ少て其神を子
以財神道り事と有くさううりに法の爲め也くく
布命ゆく神也と云ふ事は周易にあく雪人の

道の中れ一義小高の後と云せば巫祝の位と神位と
而公大人より古居工房に御ましモ此事也
事と若事くい人あり得よく公の御辯事と有る
巫祝也と云是神に餘りするのみと吾人考へと
被り事と云是國以治りて其後ひ通ひて公の御
巫祝小あらびる者なればそぞくからず事かけする士
君事は事づく事より行はずと思つてある事く中事
事ふやく事づく事より行はずと思つてある事く中事
事後秦氏の道廢と漢の代より英光の道廢とい黄
左と云ふ事と云ふ事と有る事と有る事と古の
英帝と云ふ事と云ふ事と有る事と有る事と古の

中善小入て京小治まり——故に皆れより後ハ孔門道小
釋老の伝と並べて儒釋道と稱し道といふを先
重ノ義と道教といふに由來て儒教道と申すが如ニ
或曰小家はは反對へ仰つれを近身神召せよひハ
於くも般闍國の道と思ひ此神召を巫祝を行ふる者モ
極く少く有する者と人知らず儒ハ唐云は道仙にて其の
通神ハ日奉の名されば山之道ハ嚴の之の如く圓等
あく徳慶すべくさうゆといふは御事小して
佛道ハ歎歎の名小くい釋迦モ天竺摩竭陀國の淨
飯王の女須摩室夷と幼き時々參達^{シタマ}耶輸多
羅^ラ三^ミ夫人とあや^{アヤ}——羅敷羅^ラ三^ミ夫人^{アヤ}されば
年十九小く發心出家——あなたと孚づれば國王の太子也

王位と繼^{スル}き人うらうもと廢^{スル}ひ又モあすとも弃^{スル}
お家^{トニヤリ}道せざれら意は人間^{トガク}と云^{レツコク}拉接^{シカセテ}の如くに
やひく力一^ヒと胸^{コロ}立^スせんとおりひ浮世の情狀と病
苦の如くに思ひくもと難^シく一つ以^テあ樂^{スル}にさんと
りひけむわふくひ家庭^トは又母志^{シテ}取^リ山林^ト
入り力と浮雲流水の如く小なる仰^{ハシム}ひ釋迦の伝と當ふ
と云ふよに思ひ下^トにほけ松^{の木}の君^{シテ}と云ふ既^モ
父母の事とおそれ父母^ト一^ヒ高^{タマ}事^シとばかね^ト一^ヒ父
あやりあゆ^トおもろ男女^ト交^ジり女^トこれも夫婦^トいふを
きく^ト父母^トおもれど是^モすまむ世^ト教^ル人間^ト矣^ハ

是をけとバ明方とつてやがつる士康ニ高め業成をもれ
本食派ひてきねうなれども食派未トノも食事はすま
ら多うのむち入のく食と人よ御て食成はがく少くい
傍ハ家ねく食物と之作シ故小苦行修え所とわ
ゆくは小立セリ人ともあの人象うり沙般成持あつて所に
全まは人施食のありて朝セリ食物と施さるもとま
鉢中の食物共日の食とつながわざればもとよりゆりく
食以食あく所又そのやくおん衣服も作りてあらゆハ
まく天竺の入ハ清淨派好く不淨と思ひづれり病入
取人度ぬの者すら抱えハ大下洗け水に漏とまか行小モ
汚カム事有カム衣縫とば持出く裏シミに布スラも写すり
傍カタる者を人差素サシ端カタ小弃カタり衣被布帛カツと捨ひて

ゆりて空角サクカク水を洗ひ津ナヨりて綿繡綴羅布帛キの煙キヨ
く縫カツく物紙織ツヅり集カツく繫カツ繕カツ人作カツり繡カツ畫カツ綾カツ衣
そを被カツふとすし人の身カツりゆ小くらまに抱カツうる衣よ
傍カタ衣被カツゆはそく衣被カツと身カツの法輪カツと空カツに裏シミ端カタ小弃カタり
勿論少しお傍カタは往カツとすまうぞ頭カツの樹の法輪カツ下カツを
にく胸カツに因カツて法輪カツ西カツけ頭カツを空カツに入カツて坐カツ祥カツとよてて
ねも空カツ内カツ世間カツの怪歌カツ取難カツれど自公取明カツ小きりより、以
肝カツ寒カツに當カツび人の情歌カツを教カツの歌カツとすくよた中に耽カツく貪カツ
歎カツ懊カツ恚カツ疾カツ以カツ之カツからん、以カツ害カツから毒カツと心カツて
もと除カツく丈夫カツとい眼耳鼻舌身意カツと六根カツと名づけ

色聲者餘觸法と六塵と名づけに塵の物を行するる
が今色身の事餘觸法の事うる根汎行次不外喻く六塵
と名づけぬ六塵をかゝれまく祇が遇ふ不の境界わざれ
是紙印境やすひ傷家とハシ取或引物とよし人志六
根は六塵小沙門^{アマ}をもあくにゆく様との性欲起りて
のちつまくから紙根惱^{カシナ}とが惱修^{ワガ}とばんをめりう
特くよりとぞねどすひ釋迦の道を最初始家す^ス齊
恩入無為真實^{ハイ}報恩者^{ジヤ}りふ丈と喝^ヤは意ハ父母の莫^{ハシ}大至
ニ恩^{ハシ}無^{ハシ}とあるひ故に入らは無事小根^{ハシ}恩するをそと
ソ義^{ハシ}うてな院^{ハシ}丈無^{ハシ}弃^{ハシ}されじ恩もの^{ハシ}情と被れぬ大喝
うけとひ男女の情とあとは乞食^{ハシ}故業^{ハシ}すれど夜食の
あくにゆきも身^{ハシ}もすくに歎^{ハシ}りなき財とすれどこそ大盜

械と忍耐^{ハシ}とを全く一^{ハシ}より雷^{リラ}沛^{ハシ}せき被^{ハシ}ば天地に机^{モリ}若^{ハシ}
心と全く山林^{ハシ}へ^{ハシ}遁^{ハシ}て世外^{ハシ}小丈^{ハシ}ノ福^{ハシ}ヒ^{ハシ}六塵^{ハシ}の境^{ハシ}
遇^{ハシ}ふとよもよも六塵の境^{ハシ}小沙門^{ハシ}とすれば六根更^{ハシ}は汚^{ハシ}
うもよくねど紙^{ハシ}根清淨^{ハシ}とゆひ人を動物^{ハシ}とすよ亦活^{ハシ}
れうり紙^{ハシ}小沙門^{ハシ}の流^{ハシ}觸^{ハシ}とくも命^{ハシ}とは種^{ハシ}の性
歎^{ハシ}無^{ハシ}と止^{ハシ}じけくは先^{ハシ}紙^{ハシ}根^{ハシ}家^{ハシ}小^{ハシ}事^{ハシ}事^{ハシ}者^{ハシ}
ゆひ人^{ハシ}心^{ハシ}は^{ハシ}観^{ハシ}の如^{ハシ}くすむ想^{ハシ}小^{ハシ}沙^{ハシ}院^{ハシ}ゆひうども
かく人^{ハシ}能^{ハシ}も因^{ハシ}り行^{ハシ}ふとも院^{ハシ}尋^{ハシ}犯^{ハシ}持^{ハシ}す^{ハシ}事^{ハシ}うけと^{ハシ}
事^{ハシ}念^{ハシ}事^{ハシ}想^{ハシ}而^{ハシ}まち^{ハシ}ゆれど紙^{ハシ}根^{ハシ}性^{ハシ}禪^{ハシ}とて^{ハシ}紙^{ハシ}根^{ハシ}り
あ^{ハシ}べ^{ハシ}呼^{ハシ}吸^{ハシ}の息^{ハシ}滅^{ハシ}めうふくに息^{ハシ}とあるに佛^{ハシ}と人^{ハシ}と人^{ハシ}
放^{ハシ}度^{ハシ}せば忘^{ハシ}念^{ハシ}却^{ハシ}く不^{ハシ}津^{ハシ}觀^{ハシ}つすき人の勞^{ハシ}不^{ハシ}津^{ハシ}

アリトニ紙ノ清べく向リと親起すふくい不破九
相の詩ハ是と承トナシトナヒ銀杏ノ骨好之の性と深く
カニナリヨムク月輪觀と云々骨は亦に光明圓滿の
月輪と歎て見る辨と親すかうて是はやの者也此後
拂除あく明月おがくはナヌエヌアムクハナリ月輪と曾
のあてナリヤ記トシテ後公歎其胸中に入ニ御ハシテおひら
月輪小成タク親トシ古人物觀の功徳アテ後ナハ時半
に紙ナリヨムク吉敷清トカレリヨリ水想觀ト
リキナアリ一刃消くあハ成タク紙ナリ少て是ハ人の所
如水大風の口大假^カト松木ト紙ナリ少て是ハ人の所
アテアキヘゆアリソラヒト紙ナリ少て是ハ紙也津ちの莊
炭を覗ケセキ佛菩薩乃相ゆ以親トハ法ありカヤシ小

往々志就行は清心寂静めぐ委多々報^シモ世間
惱と病済く苦難^シモりんわふくに苦難モリテモ燒^シ
サク漢譯^シは言^カト翻譯^シム是モ言^カト小^シ和諧^シモ
コト^シルセ利^シム^シも此^シハ一切世間^シの^シ活^シ人乃迷^シム
恩^シモ^シアリヤ^シトは^シモ^シ受^シム^シモ^シ義^シモ^シ有^シヤ^シト^シム
六塵^シハ六根^シト汚^シテ^シ欲^シ情^シ歌^シ行^シ報^シ物^シト^シム^シノ^シ報^シ其^シ
色^シ音^シに^シアリ^シモ^シ聲^シ氣^シ不^シ有^シ於^シ煩惱^シト^シアリ^シ苦^シ難^シト^シ有^シモ^シ
貪^シ欲^シも^シ財^シ志^シモ^シ取^シ教^シ生^シ偷^シ盜^シ也^シト^シアリ^シ安^シ樂^シ修^シ福^シの
六塵^シ也^シ身^シ小^シ也^シ我^シと^シ清^シ康^シ也^シ思^シひ^シく^シ色^シを^シう^シ一切
世間^シ本^シ小^シ也^シ我^シも^シ食^シ著^シの念^シも^シ無^シつも^シ修^シ行^シの力^シも^シ
清^シあり^シ我^シも^シ小^シ也^シ我^シと^シ清^シ家^シも^シ大^シ也^シよ^シ

は故に物の少くい聖ハ極ふぞまれて毘山弘法^{キサ}よりは
かくももも榮^{ヒラメ}トミササギ半身もひき角に急掉^{ハシタマツ}してひつゞ
く御^ミ毛瓶^{モウボウ}小さうされ方^{カタ}と極りわざばうとまうたの
四^{シテ}すりくされまでゆきうり一牛乳口病^{ヨウリ}もあらむせん
あと惜りほくにてじ迷^{ハシマ}る事^{ハシマ}そばは惜り紙開^{ハシマ}り若^{ハシマ}
佛トシハ佛ハ梵^{ブン}度^{ハシマ}トハ佛^{ブツタ}多^{ハシマ}ハ仏^{ブツ}と淨^{ハシマ}ト
御れど仏^{ハシマ}ハ是^{ハシマ}色^{ハシマ}一^{ハシマ}般^{ハシマ}明^{ハシマ}道^{ハシマ}人^{ハシマ}にあり而^{ハシマ}モ
人^{ハシマ}の一^{ハシマ}般^{ハシマ}明^{ハシマ}道^{ハシマ}人^{ハシマ}にあり而^{ハシマ}モ
八教^{ハシマ}ト^{ハシマ}す^{ハシマ}も^{ハシマ}也^{ハシマ}佛^{ハシマ}は大^{ハシマ}宗^{ハシマ}小^{ハシマ}乘^{ハシマ}五^{ハシマ}時^{ハシマ}
七^{ハシマ}教^{ハシマ}ト^{ハシマ}す^{ハシマ}も^{ハシマ}也^{ハシマ}佛^{ハシマ}は大^{ハシマ}宗^{ハシマ}小^{ハシマ}乘^{ハシマ}五^{ハシマ}時^{ハシマ}
之^{ハシマ}れに後^{ハシマ}来^{ハシマ}の祖^{ハシマ}師^{ハシマ}是^{ハシマ}に依^{ハシマ}く經^{ハシマ}の宗門^{ハシマ}と^{ハシマ}セ^{ハシマ}世^{ハシマ}
の人^{ハシマ}以^{ハシマ}教^{ハシマ}等^{ハシマ}今^{ハシマ}は世^{ハシマ}を^{ハシマ}教^{ハシマ}お^{ハシマ}し^{ハシマ}く深^{ハシマ}遠^{ハシマ}

不同^{ハシマ}は^{ハシマ}是^{ハシマ}元^{ハシマ}の法^{ハシマ}志^{ハシマ}說^{ハシマ}の^{ハシマ}にて^{ハシマ}は^{ハシマ}下^{ハシマ}統^{ハシマ}の^{ハシマ}愚^{ハシマ}民^{ハシマ}の^{ハシマ}の
義^{ハシマ}解^{ハシマ}一^{ハシマ}が^{ハシマ}は^{ハシマ}放^{ハシマ}小^{ハシマ}を^{ハシマ}佛^{ハシマ}誦^{ハシマ}終^{ハシマ}の^{ハシマ}形^{ハシマ}と^{ハシマ}校^{ハシマ}て^{ハシマ}も^{ハシマ}と
の^{ハシマ}す^{ハシマ}が^{ハシマ}你^{ハシマ}も^{ハシマ}教^{ハシマ}を^{ハシマ}繰^{ハシマ}り^{ハシマ}以^{ハシマ}んわ^{ハシマ}も^{ハシマ}汝^{ハシマ}も^{ハシマ}も^{ハシマ}實^{ハシマ}の
教^{ハシマ}を^{ハシマ}詳^{ハシマ}説^{ハシマ}く^{ハシマ}て^{ハシマ}心^{ハシマ}法^{ハシマ}修^{ハシマ}修^{ハシマ}め^{ハシマ}り^{ハシマ}が^{ハシマ}は^{ハシマ}你^{ハシマ}も^{ハシマ}在^{ハシマ}そ^{ハシマ}く^{ハシマ}す
の^{ハシマ}法^{ハシマ}と^{ハシマ}學^{ハシマ}び^{ハシマ}く^{ハシマ}後^{ハシマ}は^{ハシマ}諸^{ハシマ}經^{ハシマ}念^{ハシマ}佛^{ハシマ}と^{ハシマ}佛^{ハシマ}より^{ハシマ}く^{ハシマ}り^{ハシマ}す
は^{ハシマ}汝^{ハシマ}も^{ハシマ}是^{ハシマ}不^{ハシマ}儒^{ハシマ}者の道^{ハシマ}二^{ハシマ}帝^{ハシマ}三^{ハシマ}主^{ハシマ}の^{ハシマ}不^{ハシマ}二^{ハシマ}帝^{ハシマ}と^{ハシマ}主^{ハシマ}も
皆^{ハシマ}の^{ハシマ}至^{ハシマ}可^{ハシマ}か^{ハシマ}小^{ハシマ}も^{ハシマ}と^{ハシマ}お^{ハシマ}て^{ハシマ}先^{ハシマ}玉^{ハシマ}道^{ハシマ}と^{ハシマ}や^{ハシマ}先^{ハシマ}玉^{ハシマ}
道^{ハシマ}と^{ハシマ}大^{ハシマ}事^{ハシマ}も^{ハシマ}不^{ハシマ}可^{ハシマ}か^{ハシマ}と^{ハシマ}思^{ハシマ}ひ^{ハシマ}て^{ハシマ}不^{ハシマ}可^{ハシマ}か^{ハシマ}と^{ハシマ}思^{ハシマ}ひ^{ハシマ}て^{ハシマ}廣^{ハシマ}
大^{ハシマ}事^{ハシマ}も^{ハシマ}不^{ハシマ}可^{ハシマ}か^{ハシマ}と^{ハシマ}思^{ハシマ}ひ^{ハシマ}て^{ハシマ}不^{ハシマ}可^{ハシマ}か^{ハシマ}と^{ハシマ}思^{ハシマ}ひ^{ハシマ}て^{ハシマ}獨^{ハシマ}方^{ハシマ}の一^{ハシマ}
も^{ハシマ}と^{ハシマ}廣^{ハシマ}の^{ハシマ}不^{ハシマ}可^{ハシマ}か^{ハシマ}と^{ハシマ}思^{ハシマ}ひ^{ハシマ}て^{ハシマ}不^{ハシマ}可^{ハシマ}か^{ハシマ}と^{ハシマ}思^{ハシマ}ひ^{ハシマ}て^{ハシマ}廣^{ハシマ}
名^{ハシマ}前^{ハシマ}の^{ハシマ}相^{ハシマ}も^{ハシマ}圓^{ハシマ}と^{ハシマ}無^{ハシマ}と^{ハシマ}思^{ハシマ}ひ^{ハシマ}て^{ハシマ}廣^{ハシマ}の^{ハシマ}獨^{ハシマ}方^{ハシマ}の一^{ハシマ}
も^{ハシマ}と^{ハシマ}廣^{ハシマ}の^{ハシマ}不^{ハシマ}可^{ハシマ}か^{ハシマ}と^{ハシマ}思^{ハシマ}ひ^{ハシマ}て^{ハシマ}不^{ハシマ}可^{ハシマ}か^{ハシマ}と^{ハシマ}思^{ハシマ}ひ^{ハシマ}て^{ハシマ}廣^{ハシマ}

る道小並ナシへと同等に當るが太子には語らず本教氏のたゞ
乞食す爲成正命セイウジン食エフトテ本裏工商ワザ事取ハサウジトモ外ヨリ行スルめ
産業と作ハシメく活世ワカツと邪ジヤ余食エタシトモ著庵シガの辛ハシ戒カイの
中シに飲食エタシ奉スル力アリ戒カイりは乞以禁シテすやあひ御モロコシトモ行スル行スル
乞食エタシ奉スル者ヒト而シテ許マサニ有スル城市シティ小行モロコシノ第モダ般モラハ内ナカニ
飯マシと飲マシ食マシ釋迦シカの法ハ行スルてモ熟シテ合マツルと飲マシ食マシ食マシ
挾ミクシ小行モロコシ飲マシくと飲マシ許マサニ經キラ毛マツル衣服エタニも糞雅衣シガニと考
えシテ法ハ行スルて乞食エタシ奉スル大命シカ寺院シテイ小行モロコシ一體トウガツ僕モロコシとモ候シテひ
株サイク葉キツヌイ汲モリ水ミズの音モロコシ水ミズすスルとシテ如シテ也モロコシと人ヒト利モロコシ行スル
すシテ而シテの僧シガ衣食奉スル車馬僕役モロコシ寺院シテイ公カミ人ヒトよ
撤マサニて常アラハ般モラ以極シテる五指シラメ月ツキ以弱シテる五指シラメ月ツキをやうに示
世シテの傍シテ佛シカ法ハの和ハシメと有スルと俗シテ人ヒト小異シテりぬ行スル付シテと有スルと成
自シテよは車馬モロコシと多シテ無シテ久シテ傳シカ志シテりえバ今シテの傍シテ佛シカ
時シテ先シテ主シテは成シテりてシテ何シテとシテされシテは法ハ小表シテりゆ
之シテは音モロコシ今シテの傍シテ佛シカは一シテちシテ主シテ行スル小表シテりゆ
彼シテ大利モロコシの後シテ主シテ教シカの僕役モロコシと高シテいシテ仰シテ士シテ吏シテ國シテ
君シテ侯シテ侯シテ君シテ全シテく君シテ君シテ君シテ君シテ佛シカ法ハ又シテ
重シテり而シテ是シテは是シテの傍シテ佛シカ主シテ成シテ法ハ弱シテしシテ法ハと
抜マサニと翻シテ法ハの法ハと血脉モロコシと活天モロコシ而シテ準シテドシテ小
又シテの子シテ生シテすりシテかくまシテと清シテ財寶モロコシ法ハ清シテの人の人ヒト
宅家產モロコシと清シテりシテよシテ也モロコシ乞食エタシと火モロコシ通シテく
而シテ在シテ草シテ以シテ住スル一シテ落シテ事シテと往シテまシテすりシテ火モロコシ

不ふくい師の法と法仰よりい師の法と法歎よりい
法先法第の法と法性よりも元ま師の法歎より法名を
法眷といふ眷を親眷の眷にと親眷とは親類の眷をと
仏法より人倫法絶へどもうなうるの法と云ふは自然
の法かあら人倫の廻れがまことの法かく入佛法かは本居
一宣に集り和焉あく学問禮行をとば一味教を下す
是すねむら朋友の道かくい縁とは信義かとておほえす
名前明るの道理はまことに忠義節うちのまふておらうね
秋成ゆる法世は妻帯の傍めりて中華にあはたもれ皆
内ひゆじきの法すよとせりれんせんや兄弟の愛ハ天性
小てせうしりの物を以教くわくわくめぐらひじりちよふた鶴
あふ入を佛かくね肉ハ人間の法とてやあに見ますば

ノハ革れくい入念の傍は字後小経くとも國表よりも舊
法家御ぞく後田林と法よりはじけ下の法はくも表へ
法の法アミ中に傍縁本キ觸取うどふきよより定め
事とくも一あつ政統約考そそりと毛すむらり國家
者衆人少てなま縁の傍をうゆよ徳をも徳をぬと皆民にく
久じてあら法以應くわくはうく法とバクの傍ハ秋成とく
リがよ治玉老の民かく甚中に官縁うれ音は士大夫の類
にくひ又傍はぬり、ひりへく小それくの儀式ありは禮小
ての梵唱梵唱を歌ふくに鐘磬螺鼓と傍を樂りくみ
先釋氏も被樂以於くいもたれりこれがふくに釋氏ハ
不せかかれて別よ一つの道以至る者あゆひどふ家の
制をうけぞ士民名列に入ます者あくまでもの川よ

く今のおふるうにて國家の制と受け士民と異うりと
おもむくすりは釋迦のなき裏裏ハシミツ一からうよ是をハシマツ
天下ハシマツが下ハシマツからく行ハシマツくけりぬ自然の理坊してふれて下
國家ハシマツ人の道に捨てハ一日も宿すぞ天より庶人
すく是と解ともは一日も立ハシマツすばらひ候へりとは
向ハシマツた廣大ハシマツな延々と畢竟一もと活く極力と自家
あ樂にするのみハシマツあま下ハシマツ國家と在り道すわす
猶ハシマツら身ハシマツども當間ハシマツりやとの想思ハシマツりうてよ天下ハシマツ國家
政ハシマツすあぐハシマツれども承ハシマツひぞかて天下ハシマツの法制と受け士民
汝ハシマツは行ハシマツする者ハシマツと聖人ハシマツをすねらてなほく
天地の間ハシマツり行ハシマツり候せとくわざとある道ハシマツと云ひ有志
ち遠ハシマツうるひりふとすハシマツめあと儒宗ハシマツのとく因爲ハシマツた法

而ハシマツはまく山洪ハシマツとすり行ハシマツる處ハシマツなり上ハシマツより仰ハシマツる仰ハシマツる仰ハシマツり
大通ハシマツ小背ハシマツをなまよとゆにく有ハシマツくも儒宗ハシマツの道を至人の空
てく聖人ハシマツまたひ至人の穿ハシマツきをあつて歴ハシマツて地自然の
道ハシマツくわうで付ハシマツりぬと云却ハシマツくわうと定義ハシマツをあ
京ハシマツはすがんハシマツり大通ハシマツの道ハシマツを至人がハシマツを詔意ハシマツ加ハシマツへま
しは全く道試ハシマツ固くとくとく道ハシマツを至ハシマツ山ハシマツ一指ハシマツと云
穿ハシマツきをすがんハシマツり大通ハシマツの多山ハシマツ小苦役ハシマツ小角ハシマツが道試
開ハシマツきりとくとく人ハシマツを至ハシマツ山ハシマツは來ハシマツい
あふ道ハシマツきをなとあう易ハシマツきを候ハシマツりとくとくと近ハシマツきを易
き道試ハシマツりとくとくはあづびとくとくは半ハシマツとくとく害ハシマツあづ
六方ハシマツの達人ハシマツの穿ハシマツきをくとくは行ハシマツとくとくは連ハシマツはくとくは連ハシマツはくとくは危ハシマツき
あはくとく迷ハシマツはくとくあ福ハシマツに證ハシマツとくとくは行ハシマツはくとくは危ハシマツき

役小角ハシタケの靈能ミツモノにて山野ヤマノとわざ後人の間に宣き
て伏用ハシタケす故ハシタケから故ハシタケから今人ハシタケとも多く聰明睿智ハシタケにて
天地ハシタケも物の理ハシタケと知ハシタケく天ハシタケ下ハシタケのみに方ハシタケり不易ハシタケの道伏用
たまひハシタケかハシタケづて伏用闇ハシタケ志ハシタケ初ハシタケ人の生ハシタケより前ハシタケ久ハシタケに源
起ハシタケの生ハシタケ腐ハシタケす而ハシタケは生ハシタケすれどく自然ハシタケの氣化を
生ハシタケすれども然ハシタケ小ハシタケくはきられハシタケ其時ハシタケの人ハシタケ生ハシタケ綫ハシタケ不ハシタケ能ハシタケ
レキハシタケ伏用因ハシタケ事ハシタケふくらひ毛ハシタケ伏用半民ハシタケよしの形ハシタケ人ハシタケめてハシタケど
人ハシタケ禽獸ハシタケ小ハシタケ黒ハシタケすハシタケば留ハシタケすハシタケ一ハシタケ毛ハシタケふくらひ毛ハシタケ伏用不ハシタケ能ハシタケ人ハシタケ
主ハシタケ角ハシタケ伏用衣食ハシタケの求ハシタケすハシタケと叶ハシタケはりぬハシタケ淮ハシタケぬハシタケとねハシタケ人ハシタケ
主ハシタケ性ハシタケの智慧ハシタケ小ハシタケく鉢伏用物ハシタケを定ハシタケと御ハシタケ計ハシタケ伏用
御ハシタケ人ハシタケ性ハシタケ角ハシタケくハシタケ少ハシタケく滑ハシタケくハシタケあめハシタケ魚ハシタケうハシタケる若ハシタケ行ハシタケり法ハシタケ
者ハシタケ行ハシタケり願ハシタケす若ハシタケうハシタケ伏用不ハシタケ能ハシタケ人ハシタケを思ハシタケす

育ハシタケ飢ハシタケと免ハシタケとハシタケりて日ハシタケ光ハシタケと若ハシタケ弱ハシタケと若ハシタケ衣食ハシタケと
奪ハシタケ弱ハシタケと若ハシタケ強ハシタケと若ハシタケ衣食ハシタケと奪ハシタケりふ是ハシタケより半民ハシタケ志
中ハシタケに争用ハシタケとハシタケりて半民ハシタケは前ハシタケ靈德ハシタケ百人ハシタケの中に聰明睿
智ハシタケと神ハシタケより智ハシタケの人生ハシタケとハシタケ彼ハシタケより名ハシタケて安ハシタケの内
と放ハシタケ入ハシタケ争用ハシタケとハシタケれハシタケ小ハシタケ弱ハシタケと累ハシタケ虛ハシタケ以ハシタケな
きハシタケあハシタケきハシタケもより之ハシタケの人物ハシタケとハシタケ取ハシタケて行ハシタケと
小ハシタケ弱ハシタケの争用ハシタケとハシタケねハシタケと争用ハシタケすとハシタケはも
半民ハシタケ若ハシタケ弱ハシタケとハシタケ也ハシタケとハシタケもひも輕ハシタケとのせハシタケに御ハシタケ軍ハシタケを
歸ハシタケす終ハシタケは化游ハシタケとハシタケ小ハシタケをハシタケりて不ハシタケと遠方ハシタケの人ハシタケを歸ハシタケす
がふハシタケ前ハシタケと外ハシタケ諸人ハシタケとハシタケ君ハシタケと修ハシタケびより上古ハシタケの盤ハシタケ
古極ハシタケ人ハシタケとハシタケ色ハシタケにハシタケと後伏羲ハシタケ神農黃帝ハシタケ坐ハシタケし

亦皆總謂脣指仁德のこれら人ふくで天下を治めりま
自己もともかくして民の君主もあらざるからこそ其くらば然
の脣指仁德の至れり人以て人よし聖人上に坐えて
下の人ふ作れどもひつたすと仰て天子と称す。天子と云ふは天下の
人ハ治ほかてひき居居の如きそひよに天子也れどりふと
亦太小う扱へ小君長とまく其下と云ひし者君臣の道
そな人小父母を若はせくは禽獸ハ礼節の者从ふ。時
天母を奉るのとくわざと祭りされど祝ひあはれと
事は親とおもて添ふハ親とおもて食飯事じひ人もおも
然のやくねづと主人もに親毛の様示す。孝敬の名
伏敷をひくひく又子の道なりは自然うは雌雄牛牡の
情説をもと夫婦配偶の名をひが小父子同産文合をみる

生み人をやいあ然のゆくすりーと主人婚姻の禮と制
男女の別は三と定め以禁ドナリヒトドリ夫婦の名
始りはあ然すは因産の子數ありれば兄弟をソムリ
カリ入り年々禽獸をく因産めのまく兄弟が数ひ
才体をもたらと年々年間あくお教すやくまく小至
禽獸は明かくよとす。人をやいあ然のゆく佐もすく
義をかく相半じむ事い相殺一む害するのみまく一哉
聖人毛ノ徳義と義と朋友の道以立あるまひの君臣父子
夫婦兄弟朋友はいつ人倫の要たかられ小色以立倫もえ
典やもゆひ人間の世の道一つと聞くハアト治まつせ
又人ナ歎うむをかく歎うむをかく歎うむをかく歎うむ

不くいが、うきぬひ食わば見てほくひく、思ふせらひ
少くいが、紙の紙者にまことハ牌場ちりつざとおれ。拾奪
竊盜殺害の悪役をりむる捨奪竊盜殺害をあざの
糾ひめくはす人ら被紙騒そ義くつあと紙主く汝
きゆへは却どく人馬事小もてとすきじと半と
えうと上左の西氏うれと初一、モジテナバ筋
ぞすゆは事とあがふ禽獸のりひふきうと人の
あた義といへば、筋と事とすゆは、筋とあても
すばく半紙じ初くすきとすきじとを所取されば
あがと筋あやひは義すねうを人道ふくし冒骨
筋と人情のあく骨も玉筋もかりうとすくは筋、以
密うす筋と人情の筋と人情と筋とあがの筋ひと

心を入へが利と争ふ者ふくはまと人と争ふ物成
かよとめうて、わき者と物と争ふ多くひく思ひ裏
筋裏まなき筋、さか一小店たくらひのまことは温うき
に筋くくわりふき筋争ひよばが紙密うそ筋と人情推
のりと人情と紙密にゆくは、紙くくられど人を亦筋より
人ぐがのあくまなれど争奪の争奪と人なる筋
筋じ時すと争ふ者ふくあくひく筋のりひく筋人を紙密
一と筋事あら筋のりひく筋のりひく筋人を筋歌と制
制と筋事あら筋のりひく筋のりひく筋人を筋歌と制
筋じ事あら筋のりひく筋のりひく筋人を筋歌と制
筋も人の心よえ未具へうわかてハ、すくは上方の民へを

知りて之を廉恥とすとぞとてより勢のりひと行
ひる宣人等く被殺は事は於ひてより人ニ廉恥とぞく
萬歎小をく宣利人を多く禽獸を被さわくゆく衆人
の中にも歎のりひとぞとおれり、然るもハ猶一め思ふ
を聖人ノ教の力あくべ宣人のおそれ義より妙りハ猶、以
たかくもと禮義もくみ禮義の教ひづれくよく人間
凡れやもて天下法つと教義あくやうひ民法あくもく人にと
リに仁に宣人の徳とて益友極人ハ而用開の初の聖人とも
を漢伏羲神農炎帝とニ宣とゆひ少昊顓頊帝嚳帝堯
帝舜成帝と古ヒニ宣立帝ハ皆聖人もて天下法もくみ
故々に之宣あり、帝は帝嚳までハセのいまとあわへ
はあらねり般人の智公用をまふ不臣のわくも歎志害と

浦き衣食の至と抜け器物を取り納用以行へてゆく
民と教育する所、紙幣などはのこりもが充舜の時、乃く
教育の具と大略成能へてあ革の割合りも立ちしと
充舜聖智以ひく多くあるを嘗て累人、紙本用く友人や
お朝廷下て余暇一なすひとあ革の割度と定うれむ
お膳小をり其後夏殷周二代の空玉も省充舜の道成所
とぞとて未だ紙幣を用ひ前代の般うに沿くから換金をも
ひととて済り道は新民の法かく宣人の空玉も省充舜の道成所
紙物かくぬ小をとて物をてに解うんとすれば添助の法を
もとバ添助と云ふあくうれば劫くもふ御さんともうと御

くは第一と云ふ事は實に如くもそん候事より
法を付ける事やくは少くすられ候事より
御りんどうがすれり勧く少く少のめくうる事すら
省ふは何とも考へて既物候わせ事へどうも候事
以爲神の既物をバ暫時もまことに辭りてあつと
ひじは小室紙シラガもくらと一も小物りて有しれ
立れども好う帰カタく而まば下モダも候人法ヒキ
法は病候ねづひをもかく金處の起居心の従事と
候かと妄想ラサクもうけともと制セキて制せられ
ぬ物と強く制されし法ゆきに癖モラと而ううと
是れ心シナ候とやうと候させの事に心法と研シテんと日欲文
一と終小粒れあく瘡人ウツジン小字の若わくらはん候事より

の端少く少變故て病弱少すと因革かあひ至人の
事を被災と家ハシマくの法とばめ法せず書經シテ以
義制事ヨリ以禮制心ヨリハ殷の成湯セイタツの成つる文モジ
て至人の道の肝カミジニかく以義制事ヨリすと下モト因
家の大半ハシマの利害人の自化ハシマの小半ハシマに爲ハシマれ事ハシマれ
もかよ二と志和智に任ハシマれハ心の小過不あつと
宜ハシマ次先主事ハシマう事と法ハシマくも半調料
合ハシマとハ五分及ハシマて三五と合ハシマ前後ゆと以
義制事ヨリ以制セキ之ハシマ制セキ事ハシマと以禮制心ヨリ以禮制心ヨリ人ハシマの物ハシマ形ハシマに
種ハシマの情欲ハシマと制セキが爲ハシマ物ハシマく情欲ハシマに悉ハシマて
あれど法の思う候ハシマ事ハシマと繋ハシマ牛ハシマの放ハシマと

わき河めの瀧ありやくすりり放送妄想トナリ
先王の禮と人の情欲と訪んやうにゆうたまふるを
汾の坊小聲うれむれど情欲の折の附れ法以固くちを
主欲を密小きより以以禮制公トヤシ情欲の都と
仰そ止んよとを止ミタクニ先王の禮以れとハ
人小けりすと名ひて情もぢれど情欲を小制ぢれ事
政道もととひ下ム佛道ハソ教説もと、以率トス
御教小人布小御モ奉事、以起人と罪トモト成く
一而小恩念喜悲と教の般仏學びは甚難キ本ノミ
宣人の小背ハ小黒毛振りとも往々法限るくも
忍恕とぞだくが為小不善以れハれど君子モ下ム心半
ニ恩念喜悲ハ罪とせども亦モ無事小因くれ法以

おと身不善以テ次者と少人トドヒたゞじあ安とく
まも紙小毛するな人情少とひ情小往く禮法紙れく
高ト化の姫女に誠引くを小人モ禮法とすり情と
柳くが裏面アリテシル化の姫女ト誠取といひを名
居あそそも罪の主女と教とく誠とすらやの上あて寧シ
情の折の紙ハ祭り法也と稱初ト奉事紙繫とモ
戒もトトロベシヘと被とらは甚易シモ小紙の如クに
被紙守て情欲以制を禁小姓モ也と來ときてねじく
立失ひ生来レバ帝に禮法と手くれば為のりひと様
て視聽妄動ありとくを被紙小邊小角と底も有りふてつと
ねく力に着く解つまく我も一くかくは多耐きくまふ
たトトロ色紙精く而まざれど情欲のあびとくもあべ

やもくさうはあはれふよおひは自らと清きぬまづひ
かのとくとくまくわむとくに十日とくとくりいはをまづけ
もあり浮ウキる心チカラタメもわづつまく丈丈の魂定ミツテいかくのゆく
れ歎カキとく練固チカラタメする人成徳の本シキとゆひ徳ミツテより六
角と研カキて作シカシわ小りば力に被カツめどひひくと義
義の染固カキたり物の徳ミツテひれ歎カキとちてせひりへ
ハ酒カキをあらへくわ体カキを酒カキりは筆舞カキもそれゑふ至
る處カキを酒カキ衣子酒カキがのゆくカキきカキうるみのゆくカキあらび
心性ニヨリの徳ミツテひあらへりめうて主毒酒カキ世カキ小源カキと京カキのせたなく
程ニヨリ未カキ手カキ事カキを紙カキく家カキあらへく人カキ事カキをあらへく
性ニヨリ紙カキせられカキハ自然カキを修カキすとく富備カキの心性ニヨリと近くカキハ酒
紙カキ者カキのまカキ酒カキをひなカキ人カキハ酒カキをひとせばねカキまよひ

經書カキ小カキ禮記カキの樂記カキの中カキ致樂カキ以治心カキとひ文カキ不カキ
よりかに酒カキ心カキのみ事カキと見カキ樂記カキの意カキ聖人カキは道カキ小カキと
酒カキ心カキは實カキとカキ心カキハ酒カキ也カキ和カキ附カキと只カキあられぬ物カキとカキ
行カキかとカキ音カキとカキ紙カキ紙カキりカキとカキそカキばカキ放カキカキとカキさカキ
りカキくカキ紙カキ物カキ紙カキとカキ中カキ小カキ樂カキ小カキ有カキはカキ樂カキりカキ
とカキ紙カキとカキ紙カキとカキもカキあカキのカキとカキ要カキ念カキ新カキだカキ但
樂カキ小カキ雅カキ乐カキ俗カキ樂カキのカキあカキりカキとカキ紙カキ樂カキハカキ人カキのカキ作カキとカキ紙カキ樂カキみ
あカキ紙カキ樂カキはカキ世カキ俗カキのカキ滿カキ樂カキにカキ今カキ世カキの三カキ綠カキ津カキ場カキ理カキ志カキ
やカキ酒カキ演カキ樂カキとカキ樂記カキ小カキ紙カキ酒カキとカキ紙カキ樂カキのカキりカキに

てひ古の裏子は平日終日以側アシタツ小妻コノミと同船コウカン奉本の内シテ
凡て人ヒトへうそウソつてつもツモとうぐさす事モノく人ヒトを深
學ハラフむの事モノアハシキ時クニヒ余念ヨシムりやもとく余念ヨシムの事モノ
成ルる事モノアハシキやまくすはる事モノとふをもねりう
ある事モノと側カタ小あう琴瑟ギンセイと川カワをれかレカたてをす絶スル
う絶スル小不稱コノハシメと充余ヨリヨリをすらうりん不稱ハシメ小くいは
か小心コトコト不稱ハシメと充余ヨリヨリ不稱ハシメ小心コトコト不稱ハシメと
ありうり作ハサウエハ宋儒コンジュが心事ハシマシとくとく絶スル不稱ハシメと
服ハラフいあよううきくかくらはれの絶スル不稱ハシメ精微セイメイと被
りに宋儒コンジュの不稱ハシメ佛道ボダウとよく杜撰ヅサクうるわちと根ルの似
せぬう絶スル不稱ハシメ小及コシナばく想シヤクと何事ナシよす一不
被ハラフうりう物モノと佛道ボダウ五千餘カイセンもの被漏ハシメ被漏ハシメの

教派主キテイシテイ大法オオハ小法コハ不稱ハシメ研ハシメうり和ハ那半ハナハ御
がよの法ハと辨ハシメと精微セイメイと奥ハシマシと毫釐ガラと遠ハシメ公是
玄奇コンキ妙マウすかめりゆよ秋氏アキシの教小往ハシメと産ハシメと研ハシメ
ゆく性ハラフ外國ガイコクの事モノの爲ハシメとあううきくとくとて士農
工商フサウジも事モノ小補ハシメうく増ハシメて天下アシタツ國家カナガの内シテ行ハシメ義ハシメと安ハシメと教ハシメ有
畢竟アキニ用ハシメの路ハシメくはる人の内シテは不稱ハシメと教ハシメ有
先王アシタツの道ハシメと事モノハシメハシメと教ハシメ有ハシメて不稱ハシメと教ハシメ有
事モノと行ハシメとも莫ハシメくねとぞく小まこと不稱ハシメ一日ハシメ小於ハシメ私
道ハシメをうれることと稱ハシメられハ不焉ハシメす方ハシメに之ハシメ不稱ハシメの内シテと
云ハシメひふていふれふ高通ハシメ取ハシメたうを私ハシメと不稱ハシメの内シテ
お惑ハシメいふるものゆり少ハシメて不稱ハシメの内シテ不稱ハシメの算ハシメ道ハシメと

れのをすありばはれの道ハれの形ノ如ヘテにレモニ二帝
ニ王の道モニニ帝ニ王はたゞ此自然のたゞそゆる人間
を通かくあらますり以至人をうけほまじく用ひまよへる
てりと天下の道人のたゞ小安らむ壁ハ通色大於小必達
をねたぬあるがめくふてむれま人の性を殊され千百人
一人も實在する見識のちもくわゆりを以同くと
先舜の世にも有りべしと號へて通色大節小辯くお性をの
大節以うすして而後以恩つきそいふかく少くの後の道
とも先王の世ふは左道とあづけて遂く禁じられ先舜の
名をかく小奇異うる道とありハ皆左道めあひ禮記の王制小
執左道以乱政殺トモカク、先王のせむ死刑小
きがに主従とはかにあはててもうばはたとひ人を殺りとも

大道蓋ハ約ハ無く以れど人を統以任用をうづる事小世に弘
きりことをくて止み難ハ日中は嘗て未だ充てざらかく
めてひ周はせぬあふぬと先王のたまへて下於くさとの
捕もと立さうりが小治す而家私道詔うひを申に揚朱
墨翟老聃莊周申不害高鞅韓非子はそをかくらる
志かくもおもて治焉大権大朽木も類ハ、治者以身爲もる
體へば目當くと嘗て大権大朽木も類ハ、治者以身爲もる
より孔子の道とも索一於ひの經のゆまとまく百家九流
と納られかく天下の人民を通の罪と切りひ壁ハの
帝より嘗ての先がすうすうかまふてひ漢のあたりに治中
義にひと南北相と屬く天下にひまう處の代をまく

まそ盛小うりい老子の道も漢の代より始てりつれどよ
唐の代より盛小うりててかへ源布もく佛法と並びて釋
老の二教の外に種もあきらめて天下の心と惑ひゆ
えむハ有難公算すての聲^バ已張^ミてく勝^{シテ}を取る堂宇の光
あーとおやくはかく日をかきえ未道^シとしよと全くひ遊き
以神^シ紙^シ玩く者りゆ一々家園のなまくちゆきを^シ
小节^シへた聲^セせよりひさ^シから處^シを^シあらわすに自かへ
通^シとりゆと^シき^シ被^シ禮^シは仁義禮樂孝悌の事^シ和^シ刑
あくはれ日本小え本をう奉^シ小は不和^シ刑^シを^シ和^シ刑^シを^シ、
見^シ手^シ元^シは^シ手^シか^シと^シ被^シ衣^シといふと^シ安^シり^シ
於^シ小神代より人室四十代の後^シと^シ天子^シと^シ是^シ御^シ文姫^シ
にあり^シひひむちに^シ金闕^シを^シ御^シと^シ中^シ毒^シの言^シ人の^シ

は車^シに引^シ坐^シと^シ車^シのあひ^シ酒^シ中^シ毒^シ當^シびん^シを^シ持^シと^シ
國^シの人^シれ^シと^シ知^シり^シ人^シ徳^シ志^シ以^シ爲^シ君^シ親^シと^シ會^シ就^シり^シひ^シま
と^シ今^シ世^シの^シ被^シ車^シと^シ被^シ衣^シに^シ當^シと^シ之^シ高^シ執^シの
也^シに思^シひ^シ被^シ人^シの^シ義^シと^シ不^シふ^シと^シ日^シの^シその^シせ^シひ^シと^シ
中^シ毒^シの^シ苦^シ小^シ忍^シつ^シと^シ下^シ空^シと^シ人^シの^シ底^シく^シ詰^シり^シ
と^シ知^シれ^シと^シ下^シ久^シら^シと^シ人^シの^シ教^シ小^シ体^シと^シ大^シ執^シ小^シ端^シ
うだ玉^シ空^シよだれ^シと^シ痛^シと^シ病^シう^シま家^シ未^シ業^シ奴^シ婢^シ
喊^シ獲^シ艱^シ家^シ流^シ獨^シの事^シと^シ暴^シ唐^シ小^シあ^シと^シ下^シ牛^シ飼^シ小^シ海^シ
古^シ來^シう^シは全^シく宣^シ人の^シ苦^シて^シひ^シと^シ多^シ人^シを^シ宣^シ人^シより^シ
名^シれ^シと^シ却^シば^シは^シ成^シと^シゆふそ^シと^シも^シ叶^シて^シ智^シ人の^シ
波^シの廣^シ大^シを^シ絶^シめ^シく^シも^シに^シと^シれ^シと^シ人^シの^シ德^シ日^シの

やくすう物として此世界の人の日月の光明小照されぬるを無く
食一入一家の内に此るが日月に何ぞもあらば其の日月
をあせ事に過満するまじれをれども此と一人相處は日月
は法と感載——有ぐくわづかむをすくひめうみの
國ノ日月既て生れ人皆すまのものとす——くちくあら
くも極度に富人の如き其れが甚めが故に國その人倫
の道れども小聖人如きもまた今れども亦は法外に
ありて士民も布帛の恩しきとす——と後此感載すべし
凡聖人の法度度たまきすら者ありて一人づれ職う與へる
かくも世の人も恩報之を常へ利くを志す爲めどりよ
り取却ばは決や十分せの法度及ぶ共通で申せられ候上
トも民もさううまめを失くに徳に化育すと被ふべ若

ひま人ふもあらうへりく宣人のなまふ如何う事
うもゆのうへきくはなまゆ少くいもすれづらす人内
法度度大をきうる法度と國の代へあれけども百家争
て種々の道術せんぬつりひとともどもとば活潑下國家
めり承認く一段をれりけん法度れども秦漢以後歷代の
至不法す百家の内みて治うるは安くは色と物小怪れど
空人の道はむ般ゆくは諸事をあつたは鑿宗とあひ五穀の
は斧と走ふやくと天下の人よりうて一日じ色と絶り
てそぞくはむ般とお穀と多食とく後中に拂り或は
きも承認く相承くひく憚畏と傷とじ病とくして人と怪れ
しひも内々醫事あかく治せざれども穀人をやれども病
病承認すれば不矢景ありはすり葉れりと汗せす葉れり

強じき業の間 想ひにあす業有り醫を玄其の病不治
業の興ればも病愈い病金くはき又も殺滅くもさりひ
一トジ五鶴小傷アシれどもバモアラ終より承くわ殺滅純
つ名を實く病愈ふ事くら殺戮くわ殺と歎て極矣實れ
艺術大成の類と及第に至るをもす先王道を奉至正
にあくまで下あせ小通行すたゞよもせ小うりあ
めき人共く患く重絆し聲も赤て褐色の端とねれを人食
咎小く造の罪小はもくは蟹へじゆそざる粥と啜り飯古
饭と食く肝胃に傷り病ひゆて致するありま食ある人
咎かくあら罪よもざる如く少く凡も殺と中和の味にと
毒乳がともかく飲んで怪食以古むる人のなもま
とくあ事あにとくやも倫すりとあれ猶小人民のな

あゆりひくがもさるゆせくは業の倫すりあ
くは偏すれど病候はうりとけりばん卒卒に大毒
小毒を毒ちあとばくられ病に筋つハ偏執の力とくひ
偏執はすねうち毒氣とくひゆとぞ薬苓ブツリヤシ白附とく
きを人以寢一は諸子百家の道ともく先生の内行辨を
ら府よもくわとひくに一家の内行立はは人言列の見識
ねば共にもあくちもまた早を治れ世と治らぬふては
國家の病と瘡疾すり御うちれて裏亂の世と治るか
捷徑セツキヨアリゆともども偏すりとくひく中和の道ふり
うちれふ一あに利あれど一方に害ありとて下治せ小け
ひくの福子育ては治ら道すれた國家と治らぬふては
秋氏の注疏の小あて下也家と治ら道うげ

まことに法盛の如きは佛とて人を佛とて好まんあり
利く事へる事あるべども天下の政事と佛事とく
り生一ゆゑ余あらば日より中興するよ佛事繁
昌ふとよき事もしくは修業ゆ佛事と玉津に
すくとも家すり有り一ふくらゞよ被衣とれ
人佛の道を虧くハ一日もたゞぞひ傍依する事無
くさむかゆて口かそせ方角と色あきて國家の法
令に違ひせ因られ我心れ一といも亦一日もあらず
佛法には殺生と喫煙すれども海島の民ハ耕作ぢう
魚紙捕て產業とす漁船に其事小役じ傍依の如き
修業禮一經と诵一或ハ大法と説一或は大般若經と
説讀やくもく印をもく詔をもく詔をもく詔

家の祐くりよは魚の多く集れ人に捕られりて
魚多く捕られとは漁家有利をひて産業豐にあり
主廟惣司も小松毛傍と修小其餘澤と文ひ徳きハ
海島に住す者多し魚紙捕されども魚の殺されんこ
と終始おれすよほく紙をと因科とてひめ紅葉蘿乃力
めくねす紙捕とは佛法の源布サクシマハ海島に魚の集
まる事とはモキドリム魚り川ヨリソハ海島の民ハ資産業
伏ちひあれ机室す極く日中の内下ても東西南北の漁船小
九載千方ノ民に利て魚紙捕り紙あらく耕作とちぢ
まく紙捕り紙と云ひ事あればごくみ共蘇賣
ほく紙捕り紙と云ひ事あればごくみ共蘇賣
のた紙もじがに苦とうりおうりおうだれの名傍と海島の民の

般生と標する事、いわゞて佛法を多めに持て高き者も
海も小島の集まるゆへいたもからく次日、天藏院の御
やどより並び河毛利重綱^{シラタケ}中に入りてん候と仰せられ
さうお申すは佛の力ゆゑも禁むる所あへひまること
べきは故れどその傍候をば民の外より志の候されども亦
無儀节せまゐりみにて平元民の列と雜りあらずはす
ぞくせ俗れんふも僧は常の人よりまた者も候にらひ
し大きるも少く經持^{ハタハタ}と宣稱あり傍の友人内類も
之を古文の列じておも餘は一寺の住持めども審民と
因革小あきのみ考えがるもくに泥や漆京の学徒
又お詫詫乞食の宿は宿主源水志^{スル}くすりをちれて平民
主とほなむ行とよきむ行の中より書紙法を手向て

道程と額へ佛祖行法とちく力とだらかひ清淨安
樂行と一向ノ宗教承法求う者千百人に一人ともうは
誠小弘法中也君子也といふ處を考めては、まく詳説
極め仰聞^{アヒテ}たる儒名の法す可也成吉思汗^{イシ}端邪親と名づけく
まことに讀まざるが小共道をかへ一榮に而てくまよる爲
小弘法と爲ひとも入法す百家を爲事も利も事も
彷彿とじん教^{キヤウ}とぞくね松^{クニ}ノ思ひて下れ本紙法^{カニ}有
小弘法紙絶^{キヤウ}すハ國家は海^{シマ}のゆくかどりひ焉く
學問とく先王^{アヘン}の教^{カニ}をよめゆハ諸^{シモ}百家のたゞ
國家の病と源^{シマ}の疾苦^{アヘン}を以^テて考^{スル}よめゆハ諸^{シモ}百家のたゞ
く傍^{シマ}を古^{アヘン}聖^{シマ}教^{カニ}の者すればよの政^{シマ}たるも附は
國家の害^{シマ}すとおもねく日を終^{シマ}御^{カニ}に又^{シマ}波^{シマ}小^{シマ}道

もて此教坊カニグよりくわいがおん年え諸子百家を経カニグと
道も充舜カニグの歴カニグ載カニグされせんまと行カニグひづれにそ終カニグ
中義カニグの古代よりくわいのせとす下カニグそつと充舜カニグの歴カニグ
て治りは諸子百家と学者の傍カニグも巫祝カニグと皆カニグく
王者の民カニグ小と立法のれ小出カニグといひおちに萬國カニグ、伏説
人充舜カニグの歴教學カニグづく諸子百家と忙び或カニグ教道と
ゆも或カニグ神道をゆじきま自家のれを獨カニグそひ聲カニグへハ病カニグく
人カニグ事カニグて味下トゲ攻撃コラケの第カニグ以勝カニグすが如くうづく充舜カニグ
久成カニグ一念カニグすそれすの落カニグ小波カニグと充舜カニグの歴教學カニグ
久カニグと天カニグ下カニグの事カニグ行カニグくもよくねすすくまもと宣人カニグ
道カニグばはは極カニグと宋儒の說と同カニグひくと主義カニグに争カニグした
まひうかふらと落カニグ一車カニグにむく聖人の道カニグ捨カニグく教發

此教用カニグは口傳カニグと書本カニグとての被義カニグとされど心カニグを治カニグて乃カニグ
きくと獨治カニグするれす。宣人カニグの歴教學カニグと教義カニグの爲カニグ若
くと治カニグす者カニグは充舜カニグよりれすまと教義カニグの宣
人の中カニグに布る聖人カニグといひあらまよも後カニグの聖人カニグ
られと傳カニグる唐カニグくと才カニグ教發カニグる聖人の道カニグは一車カニグ城
國カニグと石理カニグをくよく古考カニグありとくと舊カニグの聖人の道カニグは
はく大成カニグと集カニグく教カニグめさせに垂カニグたしひ故カニグ小と恩
盡カニグよりかづくあくまもつと富儒カニグ小至カニグと大小度カニグひく
今カニグ當カニグ然カニグれす教發カニグとく程カニグ朱子教發カニグを小古
聖人カニグの下カニグ達せ教カニグあらは子恩カニグ孟子カニグ利以カニグ小と教發カニグて
一向カニグあれと教發カニグとて聖人の道カニグ極カニグく明カニグ小をうひ紀
もつぶ教人カニグの内カニグ小著カニグ。い偽名系紙カニグを學問カニグに古學カニグの

古今と國の事は志士のつる游目へ進むべくひ先此義をと
辭カヘシノく沙流カハシひあひ不審カハシもひづ再問サイモニ次第カハシい凡危争カハシと
而カハシもひづく先王の法カハシに従カハシくれすの義と述カハシい胡乱
ナラ説小河カハシ一カハシ記カハシの事カハシた少カハシくい致處カハシ止カハシて
秀細カハシ一カハシ勤辯カハシわる事カハシいわゆる達云

辯道書 畢

書辯道書後

古先聖王統御宇内カハシ也以天下カハシ爲一家以中國カハシ爲
一人當是之時車同軌カハシ書同文故異行者有誅異
言者有禁道豈有辯邪百家往而不反人執其所
見家奪其所長譬カハシ之耳目鼻口不能相通道豈無
辯邪蓋不得已也春臺先生有嘗與人辯道書書
賈須延年適見以為奇貨可居遂請上木云嗚乎
道之烈カハシ也猶七國自王也此書其終成秦政一統
之勳歟方今

昭代同文之治輿隸亦能解國字則此書之行其

必速於置郵而傳命哉。享保乙卯復月下浣
大泉莊內水野元朗書于東都神門邸

天保五庚午歲自十二月十一日起筆同十三
日於八代郡高田庄上松玖磨山中書寫之

中村萬喜直衡

薰蕕錄卷之百四十九終

薰蕕錄卷之三十立

大尾

